

ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける マイノリティ帰還者の残留実態

材 木 和 雄

広島大学大学院総合科学研究科

The Current Living Conditions of Minority Returnees after the Ethnic War: Results of the Research Conducted in Local Towns of Bosnia and Herzegovina

Kazuo ZAIKI

Studies of Civilization and Society, Graduate School of Integrated Arts and Sciences

Abstract

It passed almost 20 years since Bosnian war ended. The process of return of refugees and displaced persons to their former areas of residence is also completed for the most part. At this stage in the postwar period, more notice needs to be taken of how minority people remain and live in their place of origin because they can be thought as a major contributor to the persistence of multiethnic traits of Bosnian societies.

In this paper three research examples are examined. One is the research conducted in the town in the Federation of Bosnia and Herzegovina. Other two are researches carried out in the residential areas in the towns of Bosnian Serb Republic (“Republika Srpska”). In each area of research, either Serbs, or Croats, or Bosniaks live in a considerably difficult condition as returnees who belong to ethnic minority. This paper analyzes the factors which support their survival.

Major research findings are as follows.

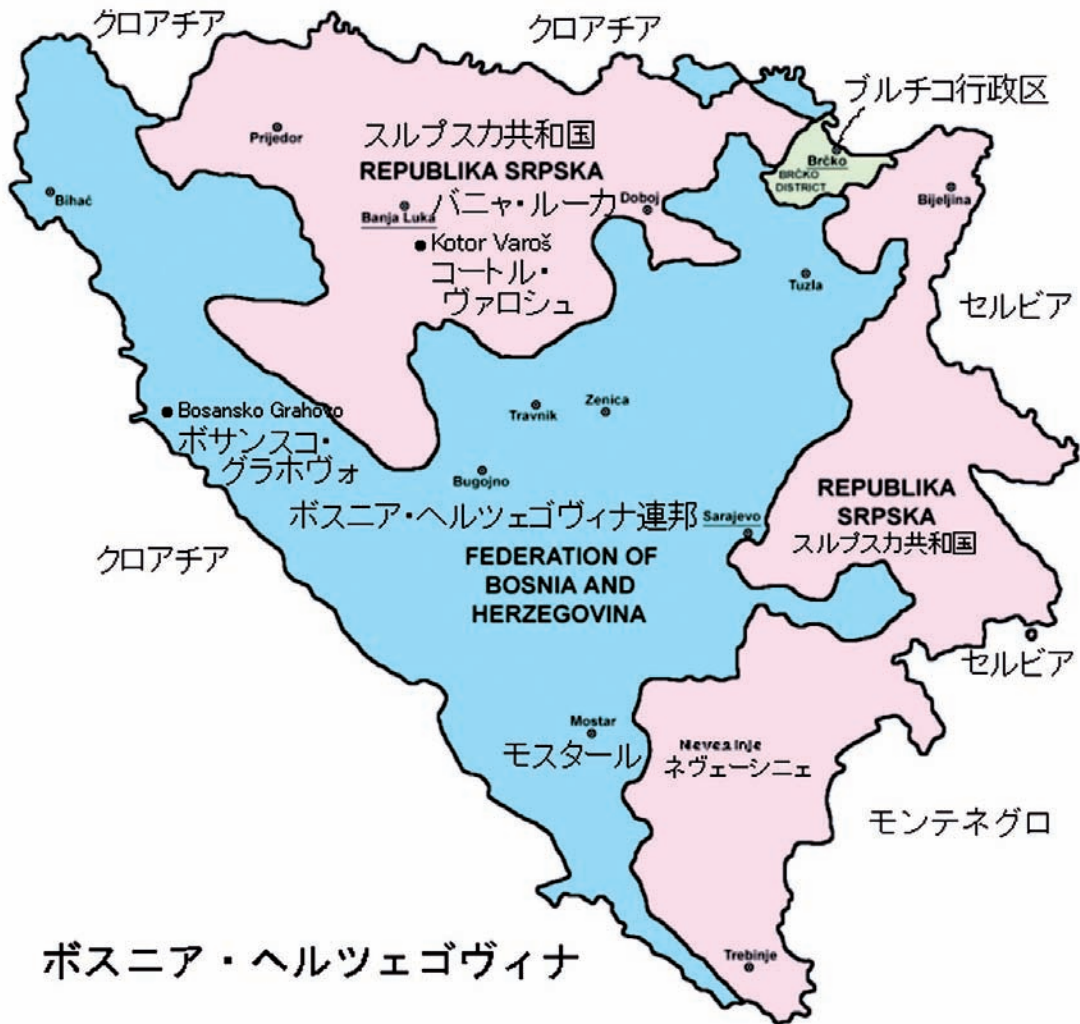
There are two fundamental factors which serve as backbone of the life of minorities. One is the full restoration of security. Namely people can live without fear. One thinks this is a matter of course. However it was not taken for granted because minority returnees often received harassment such as violence, intimidation from the majority forces after a definite period of postwar years.

Another factor is recovery of the basis for human life. This can be divided into two sub factors. One is the reconstruction of damaged houses and destroyed local infrastructure to a certain extent. The other one is possession of a means of earning a living. Aside from pensioner, this means having a job of some kind, although among minority returnees anywhere are there few who work as a full-time employee. Most of them make a living engaging in agriculture or a

home business because of rare employment opportunities.

However, the significant finding obtained from this research is the fact that there are several additional factors which provide support for the life of minorities. The first one is tenacious vitality of local residents. In other words, this is a willingness to try anything to make up for the lack of a steady source of income. The second additional support is the existence of mutual neighborhood assistance in the local town. In this point, religious communities formed by residents gathering in church or mosque also serve an important function, providing a final safety net for the living difficulty of helpless persons.

Thirdly, most of minority returnees have a special fondness for their home town. For one example, this may be a strong wish of the elderly to live and die in a familiar place. Such notions lead them to return and remain home at any cost. In other cases this can be a sense of responsibility which motivates some of high potential younger persons to return home and to do something to help ethnic brothers in home town in order to alleviate their suffering and hardship.



1 はじめに

ボスニア内戦を終結させた1995年12月の Dayton 和平協定はもう一つの目標をもっていた。それは難民の帰還の権利を実現し、多民族社会を復元することである。これは、それぞれの民族主義勢力が他民族の住民に対し実行した民族浄化 (ethnic cleansing) とその結果を国際社会が容認せず、紛争前の状態に戻そうとしたことを意味する。

しかし、Dayton 和平協定はこの目的と矛盾する内容を含んでいた。それは統一国家の枠組みを維持しながらも、この国を構成体 (entitet) と呼ばれる2つの自治単位と領土に分割したことである。その一つはボシュニャク人とクロアチア人の住民を中心とするボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦 (Federacija Bosne i Hercegovine) であり、もう一つはセルビア人の住民を主体とするセルビア人共和国 (Republika Srpska) である。両構成体は国家に近似した統治機構をもち、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは事実上、連邦制に近い国家構造をとる。さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦の内部には独自の行政政府をもつ10の県が設置された。これらの県はまたボシュニャク人中心の県、クロアチア人中心の県、両民族混合の県に分かれる。

1つの国に「連邦」と「共和国」が存在するのは異例の国家形態である。これは内戦によって達成された各民族の支配地域を Dayton 和平協定が承認した結果であった。だが、そのためにボスニア難民の帰還は「マジョリティ (多数派民族) の帰還」と「マイノリティ (少数派民族) の帰還」に分かれることになった。マジョリティの帰還とは自民族の政治勢力が支配する地域への住民の帰還であり、マイノリティの帰還とは他民族の政治勢力が支配する地域への住民の帰還である。ボスニアのように民族間の内戦が起こった国では、マジョリティの帰還に比べてマイノリティの帰還がより大きな困難を伴うことは容易に推察される。実際、各地の民族主義勢力はマイノリティの帰還を妨害し、民族浄化の結果を固定化しようとした。そのため、内戦後のしばらくの期間、マイノリティの帰還をめぐる、民族主義勢力と和平協定の履行を監視する国際社会との間で闘争が続いた。

この闘争の結果はどうか。難民の帰還に関する研究は次の2点を明らかにした。第1に内戦前の水準には及ばないが、マイノリティの帰還は一定程度実現し、それに応じて人口構成の多民族的性格が回復した。国際社会の努力は民族浄化の結果をある程度は修復した¹。ところが、第2にマイノリティの帰還者のかなりの部分は実際には元の居住地に常住していない。これは就業機会などの「持続的な帰還 (sustainable return)」の条件が欠け、生活を再建できないためである。元の居住地に常住する帰還者は年配者に偏り、農業で自活ができる農村地域に多い。若い世代の多くは出身地域では得難い良好な教育機会や社会・経済的機会に惹かれ、避難先の地域に留まっている²。

要するにマイノリティの帰還は持続的なものになっていない。このことは私の調査でも確認され、異論はない。だが、それでもどの地域でも常住するマイノリティが存在する。彼らは内戦中に居住地にとどまった人びととか、または比較的早く元の居住地に戻ってきた人びとである。難民の帰還に焦点を当てた先行研究はこのような残留者に注目してこなかった。彼らは難民にならなかった人びととか早期の帰還者であるので、それは当然のことかもしれない。しかし、もしボスニアにおける多民族社会の再建に研究者が関心をもつ場合には彼らの存在にもっと大きな注目を寄せてよいはずである。なぜなら、難民の帰還がほぼ終了した現在では残留するマイノリティ住民の存在こそがその地域の単一民族化の進行に歯止めをかけ、多民族的社会的な性格の維持に貢献しているからである。

内戦終結後にマイノリティの帰還に研究の焦点が当てられたのは至極当然である。個別にみた場合にはマイノリティの帰還が完了していない地域もあり、今後も帰還の研究を続ける必要性はある。しかしながら、和平協定の締結から20年近い年月が経過した現在ではこれまでとは異なった視点からの研究が求められている。それはマイノリティ (少数派民族) の残留と世代的な再生産がどのようになされるかという視点である。難民の帰還が終わった段階では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが今後も多民族社会を維持できるかどうか

は、マイノリティの持続的な残留と世代的な再生産が可能になるかどうかにかかっている。私はこのような問題意識をもち、この国の各地でマイノリティ住民の帰還と残留の調査を続けてきた。

このうち本稿では三つの地域での調査事例を紹介したい。一つはボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦のボサンスコ・グラホヴォで実施した調査であり、あと二つはセルビア人共和国のバニャ・ルーカとコートル・ヴァロシュの調査事例である。それぞれの地域ではセルビア人、クロアチア人、ボシュニャク人のいずれかがマイノリティの帰還者として暮らしている。以下では彼らの生活実態を述べ、その後にマイノリティ住民の残留はどのような要因によって支えられているのかを考えてみたい。

2 ボサンスコ・グラホヴォのセルビア人

2-1 町の概況

ボサンスコ・グラホヴォ (Bosansko Grahovo) はボスニア・ヘルツェゴヴィナの最西部に位置し、クロアチア共和国との国境沿いにある基礎自治体。標高は海拔500から1872メートル、豊かな森林をもつ山間の町である。気候は雨が少なく、冬は非常に寒く、夏は涼しい。1914年6月にサラエヴォでオーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者夫妻を暗殺し、第一次世界大戦勃発のきっかけを作ったセルビア人の若者、ガヴリロ・プリンツィープ (Gavrilo Princip) はこの町に生家をもつ。

この町は行政的にはボスニア連邦のヘルツェグ・ボスナ県 (Hercegbosanska županija)、通称「カントン10」(Kanton deset, 10番目の県という意味) に属する。「カントン10」は人口の8割近くをクロアチア人が占め、県レベルではクロアチア人が政治的に支配している。ところが、北部の3つの基礎自治体 (ドゥルヴァール、ボサンスコ・グラホヴォ、グラモーチ) ではセルビア人が人口の多数派を占める。このうち、ボサンスコ・グラホヴォでは内戦前 (1991年) の人口は8311人、民族構成はセルビア人7888人 (94.9%)、クロアチア人226人 (2.7%)、ボシュニャク人12人 (0.1%)、ユー

ゴスラヴィア人125人 (1.6%)、その他50人 (0.5%) であった³。

内戦末期までボサンスコ・グラホヴォはセルビア人勢力、すなわちセルビア人共和国軍 (Vojaska Republike Srpske ; VRS) の支配地域に含まれ、戦火を免れていた。ここはセルビア人が人口の95%を占める町であり、内戦開始後に町から避難したのは少数派のクロアチア人であった。ところが、内戦末期に情勢は大きく変化した。

1995年7月末に隣国のクロアチア共和国軍 (Hrvatska Vojska ; HV) の部隊は国境を越え、ボスニア北西部に攻め込んだ⁴。この作戦にはボスニアのクロアチア人武力勢力 (クロアチア防衛評議会 Hrvatsko vijeće obrane ; HVO) も加わり、大軍が押し寄せた。これに対し、セルビア人共和国軍の防衛網は手薄であり、彼らは戦闘を避けて撤退した⁵。セルビア人勢力の撤退に伴って、この地域のすべての住民は他のセルビア人勢力の支配地域に一斉に避難した。この結果、ボスニア北西部の各地域 (ドゥルヴァール、ボサンスコ・グラホヴォ、グラモーチ) は易々とクロアチア人勢力の手に落ちた。そのあと、クロアチア人勢力はセルビア人住民の住宅を略奪の上、打ち壊し、放火した。また彼らはこの地域のあらゆる建物 (工場、商店、学校、病院、役場、公共施設) とインフラ施設 (電力、通信、水道、道路など) を略奪し、破壊した。その残骸は今なお町のあちこちで見かけることができる。

内戦終了後、ボサンスコ・グラホヴォでは比較的早く避難民の帰還プロセスが始まった。基礎自治体の調べによれば、2003年末に3458人が住民登録をしていた。民族構成はセルビア人が3258人、クロアチア人が200人である。これは内戦前の人口の42%に当たる。もっとも、帰還したセルビア人の中には役場で住民登録 (身分証明書となる「個人カード」) の取得) をした後に再び町を去った者も多い。2013年の時点で住民登録をしている者は4000人弱、常住者は2000人程度と見積もられている。

2013年7月に基礎自治体の首長 (načelnik) はウロシュ・マキッチ (Uroš Makić, 1957年生) 氏。同氏は内戦前にはボサンスコ・グラホヴォの初等

学校の教師を務め、国語（この当時はセルビア・クロアチア語）を教えていた。内戦後はセルビア人共和国のバニャ・ルーカのNGOに所属、人道的支援物資の配給などセルビア人難民の帰還支援の仕事に従事していた。その後単身帰還し、2004

年から基礎自治体議会の議員を二期務め、2006年に妻子と共にボサンスコ・グラホヴォに定住した。2008年にボサンスコ・グラホヴォの首長に選ばれ、2012年10月の選挙で再選、二期目の任期を務めている⁶。



写真1 ボサンスコ・グラホヴォの役場



写真4 放火・破壊された文化センターの残骸



写真2 ボサンスコ・グラホヴォ首長のウロシュ・マキッチ氏



写真5 内戦前の唯一のホテル「ホテル・サラエヴォ」の残骸



写真3 町が目抜き通り「チトー元帥通り」



写真6 羊の放牧をするデヤン・ティーヴァン氏

マッキチ氏によれば、内戦末期から内戦終了後に破壊された住宅は4割程度が再建された。だが、これに比べるとインフラの復旧は遅れている。とくに電力施設の復旧が完了していない地域が面積でいうと4割程度残っている。しかし、住民にとって最大の問題は雇用の喪失である。内戦前にはボサンスコ・グラホヴォは工業都市であり、3500人の被雇用者がいた。しかも失業者は一人もいなかったという。しかし、内戦の末期にすべての工場施設は破壊された。現在、ボサンスコ・グラホヴォで働く被雇用者は311人、そのうちセルビア人の帰還者は41人に過ぎない。残りはクロアチア人が占める。これは次のような事情による。

現在の町の中心産業は林業と製材・木材加工業であり、基礎自治体の収入は林業関連企業が支払う森林の使用料が大半を占めている。しかし、現在町内で営業する8つの企業は内戦後に私有化され、すべてクロアチア人が所有・経営する企業となった。従業員のほとんどはクロアチア人で占められる。彼らの中にはボサンスコ・グラホヴォの外から通勤するクロアチア人が非常に多い。中には国境を越え、クロアチアのクニンから通勤しているクロアチア人も少なくない。次に公共セクターについていうと、すべてのセルビア人は内戦末期に一時、ボサンスコ・グラホヴォを去った。その間に彼らは仕事から離れた。内戦後に国家体制が変わり、この地域はクロアチア人が政治的に支配する地域になった。かつてセルビア人が就いていた公務員の仕事には内戦後に帰還したクロアチア人、または他の地域から到来したクロアチア人が就いた。そのため、セルビア人は帰還後に復職できなくなった。

それでも現在、セルビア人帰還者にとって最大の雇用の場は基礎自治体の行政組織であり、職員は23人中22人がセルビア人で占められる。ここではセルビア人の人口が多いので選挙をすれば基礎自治体の首長はセルビア人が選ばれる。そのため、首長がイニシアチブを発揮し、これまで少しずつセルビア人の採用を増やしてきた。しかし、首長の影響力は役場以外の組織には及ばない。だから、その他の公務員にはクロアチア人が圧倒的に多い。たとえば、国境警察官、警察署、郵便局、

職業紹介所、発電所などはクロアチア人の職員が大多数である。

この町では働く場が少ないことは町の中心部を歩いていても実感できる。すぐに気づくことはサービス産業の貧弱さである。たとえば、町の目抜き通りは「チト一元帥通り」と呼ばれる。しかし、それにしては寂れている。内戦前にはディスコや映画館があり、夜もにぎわっていたという文化センター（Dom Kultura）は今なお焼け跡のままであり、唯一のホテル（ホテル・サライエヴォ、Hotel Sarajevo）も黒く焼けこげた残骸を残すのみである。通りには店が数えるほどしかない。カフェが4軒、野菜と果物を売る店が1軒、食料品と雑貨を売るミニスーパーが2軒営業しているだけである。中心部の商店は他に2軒のガソリンスタンドのみである。地元の話では、閉業する店も少なくなく、近年ではカフェバーが2軒、ミニスーパーが1軒、町の入り口にあったモーテルが営業を停止した。この町で困ったことの一つはレストランが1軒もなく、外食ができないことである。カフェは飲み物しか提供しない。最初の訪問時（2012年7月）にピザの出前を注文できた店は1年後（2013年7月）の訪問時には閉業していた⁷。それだけ売り上げがよくないということである。

2-2 周辺集落の帰還者の生活

ボサンスコ・グラホヴォは7つの行政区域（Mesna Zajednica）と35の集落（naselje）から構成される。そのうち、2012年7月にいくつかの集落を訪問することができた。

最初に訪ねた場所はドーニイ・ティシュコヴァッツ（Donji Tiškovac）という名の集落。町の中心部から西に12キロ離れたクロアチア国境に近い集落である。内戦前（1991年）には265人が居住していたが、現在の人口は50人程度、このうち常住者は24人である。しかも、冬場には高齢者が寒さを避けるために出て行くので住人もっと少なくなるという。

最初に話を聞いたのはミルコ・ビエロトミッチ（Mirko Bjelotomić、1957年生）氏。内戦前はクロアチアのクニンの企業へ乗用車で通勤してい

たが、戦争によって失業した⁸。同氏は内戦末期に両親と妻子と共にセルビア北部の町のキキンダ (Kikinda) に避難した。2000年に両親が元の居住地に帰還したが、その後に父親が死亡。母親が一人暮らしになったので自分も帰還した。妻と二人の娘は今もセルビアに居住する。現在は母と二人暮らし。母の年金 (父親の遺族年金) と農業が収入源である。電力施設は復旧していないので、発電機によって電気を得ている。統一国家の時代にドーニイ・ティシュコヴァツでは隣国のクロアチアから電気が供給されていた。しかし、内戦末期にクロアチア人勢力は電線を寸断し、電力供給が途絶えた。利用者が少ないため、クロアチアの側からは再び電線を敷設する計画はないと述べる。他方、ボサンスコ・グラホヴォの側からの電線の延長は財政上、困難な状況にある。

その帰りに通りがかったのはストジシュタ (Stožiča) という集落である。町の中心部から西に6キロ離れた地点にあり、居住者はわずか3人に過ぎない。ここも電力が復旧していない。出会った人物はデヤン・ティーヴァン (Dejan Tivan, 1973年生) 氏。同氏は内戦中に徴兵され、セルビア人共和国軍の兵士となったが、1995年7月にクロアチア人勢力の捕虜となった。内戦後に結婚、家族は妻 (1980年生)、息子 (2004年生)、娘 (2005年生)。主要な収入源は牧畜であり、150頭の羊を飼育している。生活には不便な地区のため、建て直した住宅には住んでいない。ボサンスコ・グラホヴォの中心部に妻の実家があり、妻子と共にそこで暮らしている。ティーヴァン氏は市内から毎日ここに通い、羊の放牧を行っている。ストジシュタの住宅は日中の休憩と羊の管理のために利用するのみである。

日を改めて訪問した場所はプレオダツ (Preodac) という集落。町の中心部から東に30キロ離れ、中心部からもっとも遠い地区の一つである。この集落には内戦前 (1991年) に195人が居住していた。1962年までは独立した基礎自治体 (opština) であり、そのために役場、警察、初等学校、郵便局など一通りの公共施設がそろっていた。しかし、内戦末期から内戦後にすべて破壊され、今は残骸を残すのみである。内戦後には12軒の家

族が帰還し、25人程度が常住している⁹。

インタビューに応じてくれた人物はドミタル・シミージェイ (Domitar Simidžije, 1943年生) 氏である。同氏は内戦前にボサンスコ・グラホヴォの主要な企業の一つであった林業関連企業シュマーリヤ (Šumarija) で木材加工の技師をしていた。1995年7月のセルビア人共和国軍の撤退に伴ってプレオダツを離れ、妻子と共にセルビア人勢力の支配地域であるバニャ・ルーカに避難した。その後、娘と息子は職を求め、セルビアのベオグラードに移住した。1999年5月にシミージェイ氏は妻と帰還した。2000年にオーストリアの援助団体から助成金を獲得し、住宅を再建した。2006年に妻が死亡したため、息子のミロラド (Milorad, 1966年生) が実家に戻った。娘のスラヴィツァ (Slavica, 1965年生) はベオグラードで就職・結婚し、夫および3人の子どもと生活している。しかし、父親の様子を見るために定期的に実家に戻ってきている。2012年7月に私が訪問したときも、牧草の刈り取り作業の手伝いのために実家に戻っていた。

一家の収入源は農業とシミージェイ氏が受給する年金である。シミージェイ氏は5ヘクタールの農地を所有し、牧草、小麦・大麦、トウモロコシなどの穀物を栽培するほかに、乳牛と馬を2頭、羊を50頭、にわとりを10羽、飼育している。住宅の庭先には養魚池を作り、鯉を養殖している。

電力施設が再建されていないところでは、各家庭は発電機によって電気を起こしている。通常発電機の動力源はガソリンを使用するが、シミージェイ氏の家では近くに小川が流れているので水車を動力源にしている。水車は同時に製粉にも利用されている。

シミージェイ氏は幼少から右手に障害があるが、これまでそれをまったく苦にせず仕事をしてきた。現在も器用に道具を使いこなし、農作業に従事する。体は元気だが、気がかりなことは息子のミロラドが未婚であることである。ここでは結婚適齢期の女性は皆無であり、冗談交じりではあるが、ぜひ日本から若い女性を連れてきてほしいと親子共々述べている。

2-3 中心部の帰還者の生活

次にボサンスコ・グラホヴォの中心部に居住する帰還者の生活に焦点を当てたい。すでに述べたように、ボサンスコ・グラホヴォの住民にとって

最大の問題は雇用機会の少なさである。その中でセルビア人帰還者にとって最大の雇用の場を提供しているのは役場、すなわち基礎自治体の行政組織である。

2013年7月、役場の中ではもっとも最近に採用



写真7 ティーヴァン氏が飼育する羊



写真10 干し草の収集作業をするシミージェ氏



写真8 ドミタル・シミージェ氏



写真11 養魚池



写真9 シミージェ氏の息子のミロラドと娘のスラヴィッツァ



写真12 水車小屋

された職員に話を聞くことができた。その人物はシーニシャ・ビルビヤ (Siniša Bilbija, 1965年生) 氏。役場で不動産の登記の仕事を担当する。家族構成は父親スレート (Sreto, 1938年生)、母親イエラ (Jela, 1942年生)、弟ネボイシャ (Nebojša, 1967年生)、弟の妻アナ (Ana, 1978年生)、弟の娘ヨヴァーナ (Jovana, 2003年生)。ビルビヤ氏自身は未婚である。内戦前に父親はギムナジウムで歴史を教え、母親は初等学校の教師を務めていた。両親は共に年金生活に入っている。また両親は住宅を二つもっている。そのため現在、ビルビヤ氏は農村部にある父親の実家の住宅に住み、弟夫婦は両親が市内に獲得したアパートメントに住んでいる。

内戦中にビルビヤ氏は弟と共にセルビア人共和国軍に徴兵された。1995年7月のクロアチア人勢力の進攻に伴って両親はセルビアのベオグラード

に避難、親戚の家に滞在した。1999年に一家はボサンスコ・グラホヴォに帰還、住宅の修理を始めた。農村部の自宅は幸い損傷は小さかった。中心部に所有するアパートメントはクロアチア人



写真15 住宅の裏側にあるコヴァチェヴィッチ氏の作業場



写真13 愛用のBMW社製バイクで通勤する基礎自治体職員のドラギシャ・コヴァチェヴィッチ氏



写真16 ガラスの加工作業場



写真14 コヴァチェヴィッチ氏の住宅 (左半分の1階が民宿で4部屋を備える)



写真17 クロアチア人の製材所経営者ゼーリッチ氏(左)とセルビア人の労働者ラドヴォイ・マリッチ氏

が占拠していたが、2001年にこれを取り戻した。そのためこれも損傷が小さかった。

ビルビヤ氏は2001年に初等学校の教員に採用された。科目は英語である。しかし、2009年に整理解雇の対象になり、給与の支払いを停止され、事実上失業した。その後は自営業を始め、主に電気の配線やテレビアンテナの取り付け工事などで現金収入を得てきた。弟は大工仕事に従事し、住宅の修理や再建を請け負った。その後、2013年4月に基礎自治体の職員として採用され、現在に至る。ビルビヤ氏の実家は4ヘクタールの農地を所有する。家族で耕作し、牧草と穀物（小麦、大麦、トウモロコシ）、野菜（トマト、キュウリ、ジャガイモ、タマネギ）を栽培している。また牛や豚、にわとりなどの家畜もいる。そのため、主要な食料をほぼ自給できると述べる。

しかしながら、町の中心部に居住する住民の中でもっとも詳しい情報を得たのは基礎自治体職員のドラギシャ・コヴァチェヴィッチ（Dragiša Kovačević、1960年生）氏である。ボサンスコ・グラホヴォにはホテルがなく、二度の訪問時（2012年7月と2013年7月）にはコヴァチェヴィッチ氏の自宅に宿泊することになったからである。そのため、単に話を聞くだけでなく、寝食を共にし、実際の暮らしぶりを観察することができた。

コヴァチェヴィッチ氏は内戦前にはボサンスコ・グラホヴォの土壌販売会社トレセット（Treset）で経理の仕事をしていた。1992年春の内戦開始後、同氏は直ちにセルビア人共和国軍に徴兵され、1996年3月に除隊した。この間、1991年に同級生だった女性と結婚し、家族をもつことになった。家族構成は妻ミレーナ（Milena、1960年生）、長女ミールナ（Mirna、1993年生）、長男ドゥーシャン（Dušan、1996年生）、母親のマルタ（Marta、1938年生）。父親はボサンスコ・グラホヴォの企業で運転手をしてしたが、内戦前の1986年に勤務中の交通事故で亡くなっている。

1995年7月のセルビア人共和国軍の撤退に伴って、コヴァチェヴィッチ氏の家族はセルビア北部の町のキキンダ（Kikinda）に避難した。1997年になると避難民の中には自宅に帰還しようとする者が現れた。その一人がコヴァチェヴィッチ氏で

あった。家族はセルビアにいたが、同氏は単身で町の状況を見るために戻った。1997年11月の地方選挙にコヴァチェヴィッチ氏は立候補し、基礎自治体議会の議員に当選した。議員の互選によって同氏はボサンスコ・グラホヴォの首長（načelnik）になった。彼は内戦後最初の首長であった。

首長の仕事を遂行するため、1998年2月にコヴァチェヴィッチ氏は単身でボサンスコ・グラホヴォに帰還した。しかし、自宅はボスニア中部の町トラヴニク（Travnik）を追い出されたクロアチア人の家族が占拠していた。そのため、コヴァチェヴィッチ氏は知り合いの住宅の部屋を間借りせざるを得なかった。クロアチア人の家族が出て行き、自宅を取り戻したのは2000年の10月である。この間、2000年3月、コヴァチェヴィッチ氏は任期の途中で首長の地位を辞職した。財政難から住民に約束した政策を実現できず、責任をとらざるを得なくなったからだと述べている。

その後、4年間は失業状態になった。そのため、自宅で自営のビジネスを開業した。主な仕事は木工細工とガラス屋である。今でも自宅に作業場を残し、仕事や配達に使用する自動車（ピックアップトラック）を置いている。何かの事情で再び仕事を失った場合にすぐに自営業を再開するためである。現在も友人・知人の求めに応じてガラス切りをすることがある。2013年7月に私が滞在していた間でも知人から頼まれ、ガラスの写真ケースの修理をしていた。

その後、コヴァチェヴィッチ氏は2004年10月の地方選挙に立候補し、当選した。基礎自治体議会の議員に復帰し、首長の顧問（Savjetnik）の職を務めた。2008年10月の選挙でもコヴァチェヴィッチ氏は議会の議員に当選した。しかし、同氏が所属する政党と対立・抗争していた政党に属するマキッチが首長に当選したために、コヴァチェヴィッチ氏は直ちに首長顧問の地位を解職された。議員報酬よりも首長顧問の職の方がずっと給料が高かったため、彼は再び大きな収入源を失った。しかし、コヴァチェヴィッチ氏は捲土重来を期し、ここから一大奮起をした。猛勉強をして行政上の資格を取得、自治体職員の公募に応募した。その結果、2009年にコヴァチェヴィッチ氏

は基礎自治体の行政職、市民保護サービス (Služba za civilnu zaštitu) の責任者として復職した。公募の応募者の中で条件を満たす者は彼だけだったので、首長のマキッチも彼を採用せざるを得なかったと述べる。コヴァチェヴィッチ氏は2010年に任期途中で基礎自治体議会の議員を辞職した。行政職と立法職は利益相反があるためだからだと彼は説明した。それ以来、同氏は政治を離れ、行政職に専念している。

コヴァチェヴィッチ氏の母親は同氏が自宅を取り戻したのでボサンスコ・グラホヴォに帰還した。しかし、妻子はボサンスコ・グラホヴォには戻らずにセルビア人共和国の事実上の首府バニャ・ルーカに移動した。妻のミレーナがバニャ・ルーカの企業に職を得たためである。現在は管理職の地位にあるという。その後も妻子はバニャ・ルーカに居住し、妻は住宅を購入した。二人の子どもはバニャ・ルーカで教育を受け、2013年7月現在、娘のミールナはバニャ・ルーカ大学経済学部に在籍、息子のドゥーシャンはギムナジウムに通っている。この数年間、家族と会うためにコヴァチェヴィッチ氏は月に2回程度、週末にバニャ・ルーカの自宅に通っている。

コヴァチェヴィッチ氏の両親は第二次世界大戦後に近隣の農村からボサンスコ・グラホヴォに移住してきた。したがって、この地域には農地を所有していない。庭先に自家消費用の家庭菜園をもつのみである。しかしながら、コヴァチェヴィッチ氏の母親は月額230KM(=115ユーロ)の年金(死亡した夫の遺族年金)を受給している。加えてコヴァチェヴィッチ氏は自宅の空き部屋を改造し、4部屋の貸部屋を作った。各部屋に3台の手製のベッドを備え付けているので最大12人が宿泊できる。これを民宿として母親に管理させ、宿代を彼女の副収入としている。主に道路の舗装や電線の敷設などのために短期滞在する施工業者が素泊まりで利用している。コヴァチェヴィッチ氏が私を泊めたのもこの貸部屋の一つであった。

2-4 その他の重要な情報提供者

ボサンスコ・グラホヴォではその他に3種類の

人びとに話を聞くことができた。一つは地元のクロアチア人であり、もう一つは初等学校の校長、あと一つはこの地に住む若者である。それぞれに重要な情報を得ることができた。

地元のクロアチア人はコヴァチェヴィッチ氏の友人のミロ斯拉ヴ・ゼーリッチ (Miroslav Zerić、1964年生) 氏。ボサンスコ・グラホヴォ生まれのクロアチア人である。クロアチア人の妻がいるが、子どもはいない。ゼーリッチ氏は内戦前には町の企業に勤めていたが、内戦が始まった1992年、同氏はクロアチア人勢力が支配する西に50キロに離れた町リーヴノ (Livno) に避難した。現在の「カントン10」の中心都市である。ゼーリッチ氏はクロアチア人勢力がボサンスコ・グラホヴォを制圧した1995年に帰還し、弟のヨシプ (Josip Zerić、1971年生、未婚) と共に町の警察署に警官として採用された。兄のゼーリッチ氏は2011年に警察署を退職し、町中に製材所を開業した。弟のヨシプは今なお警察署に勤めている。私が最初に訪問したときには通常は一人で製材の作業に従事し、仕事が忙しいときには弟が手伝うと述べていたが、二度目の訪問時にはベオグラードから帰還したセルビア人を従業員として採用していた。それだけ製材所の経営が順調であり、仕事が増えているようである。コヴァチェヴィッチ氏とは内戦前から親しい友人関係にあり、今も通りがかったときには必ず立ち寄る間柄である。

次にボサンスコ・グラホヴォの初等学校の校長を勤めるヴォヨ・マリッチ (Vojo Marić、1955年生) 氏である。マリッチ氏は内戦前にはギムナジウムの体育教師をしていた。内戦期間中はセルビア人共和国軍に徴兵されたが、除隊後は両親・兄と共にセルビアのベオグラードに居住していた。2001年に自宅を再建し、帰還した。2011年に公募に応募し、初等学校の校長に採用された。実家は10ヘクタールの農地を所有し、失業中は農業に従事、生活の糧を得ていた。マリッチ氏は未婚である。

内戦前にボサンスコ・グラホヴォには二つの初等学校があったが、人口が減った現在では一つに統合されている。2012-13年度の児童数は86人 (1年生11、2年生13、3年生8、4年生3、5年生12、6年生6、7年生6、8年生14、9年生12)。毎年、

概ね10人程度の児童数がある。教師は17人、うち常勤の教師は4人、科目担当の非常勤教師が13人である。



写真18 ボサンスコ・グラホヴォの初等学校

初等学校ではクロアチア人とセルビア人の児童が共に学んでいる。ただし、言語、歴史、地理についてはセルビア語の教科書とクロアチア語の教科書を併用している。当初はクロアチア語の教科書だけであったが、2004年からセルビア語の教科書の使用が認められた。旧ユーゴスラヴィア連邦の時代にはセルビア語とクロアチア語は同一の言語とみなされ、国語の教科書は一つであった¹⁰。しかし、ユーゴスラヴィア連邦解体後にはセルビア語とクロアチア語は別々の言語とみなされ、学校でも別々の教科書で教えられるようになった。セルビア語の教科書はキリル文字で書かれ、クロアチア語の教科書はラテン文字で書かれている。国語以外の科目でもセルビア語の教科書とクロアチア語の教科書は文字が違うだけでなく、教える

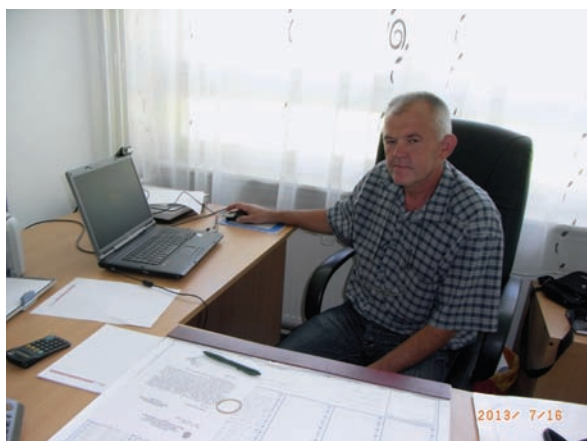


写真19 初等教育学校長 ヴォヨ・マリッチ氏



写真21 右はクロアチア人の警察官ダルコ・サリッチ氏、左は友人のセルビア人の帰還者ミロシュ・ドミトリッチ氏



写真20 町中に集うボサンスコ・グラホヴォ生まれの少年、右から2番目はクロアチア人、他はセルビア人の同級生



写真22 ボサンスコ・グラホヴォの森林監察官ヴラトウカ・ヴィシェクルーナ氏

内容にも違いがある。とくに歴史はセルビア人の観点とクロアチア人の観点で取り上げられる内容や事件の評価に大きな相違がある。信仰の時間はセルビア人、クロアチア人の児童は別々に授業を受けている。

しかし、児童の間では民族の違いは意識されず、良好な関係が保たれている。子どもたちは放課後も町中で仲良く一緒に遊んでいるという。これは実際にその通りのようである。通りや空き地で遊んでいる子どもたちの中にはセルビア人とクロアチア人が混在していた。

三番目はボサンスコ・グラホヴォの若者である。三人の男女に話を聞くことができた。一人はダルコ・サリッチ (Darko Sarić, 1988年生)、当年25歳のクロアチア人である。職業は警官、この町の警察署に勤務する。家族構成は父スタンコ (Stanko, 1955年生)、母ミレーナ (Milena, 1960年生)、長兄クレーショ (Krešo, 1980年生)、次兄ズドラフコ (Zdravko, 1983年生)。内戦前に父親はボサンスコ・グラホヴォの企業で運転手として働いていた。内戦の開始後の1992年、彼らはクロアチア人勢力が支配する町リーヴノに避難した。

1995年7月末にセルビア人勢力が撤退した後に、父親のスタンコ・サリッチ (Stanko Sarić, 1955年生) はボサンスコ・グラホヴォに帰還、クロアチア人勢力の支配の下で町の警察署の警官に採用された。母親のミレーナ (Milena, 1960年生) は日本ではハローワークに当たる公共の職業紹介所 (Zavod za zapošljavanje) に就職、長兄のクレーショ (Krešo, 1980年生) は学卒後に公営企業である電力供給会社 (Elektroprivreda BiH) に勤務、次兄のズドラフコ (Zdravko, 1983年生) も学卒後に社会保険事務所 (Zavod za zdravstveno osiguranje) の職員になった。町のセルビア人住民が就職難に喘いでいる中でクロアチア人の彼らはすべて公務員の仕事に就いていることは誠に印象的である。

ダルコ・サリッチ氏はまだモスタール大学哲学部の学生であるが¹¹、2013年7月からボサンスコ・グラホヴォの警察署の警官に採用された。退職者があり、警察官のポストに空席ができたので、公募に応募、採用されたと述べる。町の警察署の職

員は30人であるが、クロアチア人は20人、セルビア人は10人である。兄のクレーショは結婚し、クロアチアのクニンにアパートメントを購入、国境を越えて毎日通勤している。サリッチ氏の趣味はスポーツ、とくにサッカーを得意とする。サッカーの競技会を開催することもよくある。私が滞在していたときにも近隣の町からアマチュアのクラブチームを招き、初等学校の運動場で盛大なトーナメントを開催した。また勤務が終わった後にサッカー教室を開き、ボランティアで地元の子どもにサッカーを教えている¹²。

サリッチ氏はクロアチア人であるが、セルビア人の若者と仲がよい。何のわだかまりなく付き合っている。たとえば、私と話し込んでいるときに警察署の中の部屋に入ってきたのはセルビア人の友人のミロシュ・ドミトロヴィッチ (Miloš Dmitrović, 1990年生) 氏である。彼の両親は2005年に一時的に帰還し、助成金を得て住宅を再建した。しかし、当地では仕事がないためにここには住まず、今もセルビアのベオグラードに住んでいる。ドミトロヴィッチ氏はベオグラードの中等学校を卒業し、近年ボサンスコ・グラホヴォに帰還、祖母と共に両親が再建した住宅に住む。仕事はなく、主な収入源は農業と祖母の年金、両親からの仕送りである。彼は9.5ヘクタールの農地を耕作し、牧草と穀物を栽培している。農業を拡大するにはトラクターを買う資金が必要だという。ドミトロヴィッチ氏はサリッチ氏のサッカーの仲間であり、試合の打ち合わせにきた。

もう一人の若者はヴラトウカ・ヴィシェクルーナ (Vlatka Višekruna, 1987年生) 氏、当年26歳、森林監督署で働くセルビア人の女性である。家族は母親ブランカ (Branka, 1964年生) と兄のヴラド (Vlado, 1985年生)。父親のスラフコ (Slavko, 1957年生) は2007年に死亡した。父親のスラフコと母親のブランカは内戦前には共にボサンスコ・グラホヴォの林業関連の企業シュマーリヤで働いていた。1995年7月末のセルビア人勢力の撤退後に一家は、セルビア人勢力の支配地域のプルニャーヴォル (Prnjavor) に避難した。両親は2002年に自宅を再建し、ボサンスコ・グラホヴォに帰還した。彼女は町の中心部に部屋を借りし

ているが、実家は中心部から18キロ離れたティツチェヴォ（Tičevo）という農村集落にある。

ヴィシエクルーナさんは隣町のドゥルヴァールのギムナジウムを卒業後、2006年にバニャ・ルーカ大学に入学、農学部で林業問題を研究した。2012年3月に学士号を取得、2012年11月に森林監督署の専門職員として採用された。ボサンスコ・グラホヴォの基礎自治体の首長マキッチから推薦を受けたことが採用に大きく影響したと述べる。この町から推薦を受けた者は彼女一人であったため、優先的に採用された。実はボサンスコ・グラホヴォからは森林監督署に就職を希望する学生がもう一人いたが、彼は推薦を得られなかったため、採用されなかった。彼女は卒業から8ヶ月で就職できたが、彼女によればこれは非常に早いケースであり、二、三年待つことは珍しくない。彼女の同級生の中にはまだ就職できていない者も多い。森林監督署にはクロアチア人とセルビア人の職員は6対4の割合でいる。民族間の人間関係は良好であり、とくに問題はないとのことであった。なお彼女は幸いに就職できたが、二歳上の兄は中等学校を卒業後に一度も就職していない。ティツチェヴォの実家で母親と暮らし、農作業をしながら、就職の機会を待っている。

3 バニャ・ルーカとその周辺部のボシュニャク人およびクロアチア人

3-1 バニャ・ルーカにおける民族浄化

バニャ・ルーカ（Banja Luka）はボスニア・ヘルツェゴヴィナの北部に位置し、この国の二つ

表1 バニャ・ルーカの民族別人口構成の変化

	1991		2011	
	人口数	比率(%)	人口数	比率(%)
セルビア人	106,826	54.59	209,549	93.90
ボシュニャク人	28,558	14.59	10,071	4.10
クロアチア人	29,026	14.83	3,699	1.60
ユーゴスラヴィア人	23,656	12.09		
その他	7,626	3.90	960	0.40
合計	195,692	100.00	225,279	100.00

注：1991年は人口調査の結果、2011年は「バニャ・ルーカに帰還した市民の連合」(Udruženje građana povratnika u Banjaluku)が実施した集計結果。

の構成体の一つであるセルビア人共和国の実質的な首府である。内戦前の1991年の人口は195,692人、サラエヴォに次ぐ大きな都市である。民族構成はセルビア人106,826人(55.6%)、クロアチア人29,026人(14.8%)、ボシュニャク人28,558人(14.6%)、ユーゴスラヴィア人7,626人(3.9%)であった。セルビア人が過半数を占めるが、クロアチア人やボシュニャク人も一定の割合を占めていた。町の中心部にはセルビア正教会の大聖堂とカトリック教会の大聖堂が至近距離で対峙し、また500メートルほど離れた場所にはイスラームのモスクがある。バニャ・ルーカはサラエヴォやモスタールと同様に三民族が共住する典型的な多文化都市であった。

バニャ・ルーカはセルビア人勢力の牙城であり、かつ内戦の前線から離れていたため、内戦中に戦闘がなかった。そのため、市街地は損傷を受けなかった。しかし、他の地域と同様に厳しい民族浄化が実行された。標的にされたのは非セルビア人、とくにクロアチア人とボシュニャク人である。

内戦が始まるとあらゆる職場ではセルビア人でない者は解雇された。非セルビア人の年金受給者に対しては年金の支払いが停止された。周辺の農村部では無頼の暴力集団が徘徊し、クロアチア人やボシュニャク人の住宅に押し入って住民に暴力をふるい、金品を強要した。市内でも路上で非セルビア人、とくにボシュニャク人がセルビア人から暴行を受ける事件が頻発した。カトリック教会は様々な嫌がらせを受け、イスラームのモスクはすべて打ち壊された。地元の警察はこのような行為を黙認していた。セルビア人でない男性で兵役可能な年齢層の者は奉仕労働を強要された。彼らの多くはセルビア人勢力の部隊に配属され、重労働や汚れ仕事に従事させられた。彼らの中には敵方の攻撃を受けて死傷する者もいた。恐怖を感じた非セルビア人の市民の中にはバニャ・ルーカを脱出する者が続出した。

内戦の末期に民族浄化が徹底される事態が発生した。きっかけは大量のセルビア人難民が押し寄せたことである。1995年8月にクロアチア政府軍はクロアチアのセルビア人勢力の占領地域に総攻撃を仕掛けた。セルビア人勢力と支配地域に居住

していた住民は一斉にクロアチアを脱出し、隣接するボスニアのセルビア人勢力の支配地域に入った。クロアチアから到来した人びとは20万人、さらにボスニア北西部からの難民も同時期に押し寄せ、町は一時セルビア人難民であふれかえった。彼らの大半はセルビアに向かったが、一部の集団はバニャ・ルーカに定住を決めた。セルビア人難民は町を去った非セルビア人が残した住宅を勝手に住み着いたが、それだけでは住宅が足りないので、一部は居住者がいる非セルビア人の住宅に押し入った。とくに大きな被害を被ったのはボシュニャク人である。彼らは暴力や脅迫によって無理矢理に立ち退きをさせられた。こうして最後まで残っていた非セルビア人の住民のほとんどが住居を追い出されることになった。

1995年12月に内戦は終了し、その後に非セルビア人住民が失った不動産の返還のプロセスも完了した。しかし、この20年間のバニャ・ルーカの人口と民族構成は大きく変わった(表1)。セルビア人の数が大幅に増加した一方で、非セルビア人の人口は著しく減少した。セルビア人の人口はこの20年間に倍増し、約21万人、構成比率は93.9%になった。これに対し、ボシュニャク人は3分の1に減少し、1万人になった。さらにクロアチア人は1991年の8分の1に減少し、3700人となった。

バニャ・ルーカ市内に帰還し、残留するボシュニャク人とクロアチア人については前稿で聞き取

りの結果を述べている¹³。重複を避けるためにそれらは繰り返さない。しかし、そのうちの一人についてはその後に職場を訪問し、新たな情報を得た。それを述べておきたい。

その人物はバニャ・ルーカ生まれのクロアチア人であるイーゴル・ルケンダ(Igor Lukenda、1974年生)氏。ルケンダ氏は当年39歳、「バニャ・ルーカ社会教育センター(Socijalno-Edukativni Centar Banja Luka)」の所長を務める。

彼は内戦の最中の1993年1月に両親と共にバニャ・ルーカを脱出し、ボスニア難民として第三国へ逃れた。その際に両親はスイスに庇護を求めたが、ルケンダ氏はオーストリアに向かった。兄が1年前にインスブルックに来ていたからである。1994年に彼はインスブルック大学神学部に入學、1997年に同大学心理学部に転学し、2001年に大学院に進学した。彼の兄は1998年にインスブルック大学工学部を卒業、オーストリアの企業に就職し、そこで定住している。他方、両親は内戦終了後にスイスを離れたが、ボスニアには帰還せず、クロアチアのプラシュキ(Plaški)に移住した。そこはクロアチア政府軍の総攻撃によってセルビア人勢力が退去した町であった。彼らはバニャ・ルーカに戻る意思はなく、クロアチアに定住している。ルケンダ氏は2004年にインスブルックの大学院を修了後、2005年にカリタス(Caritas)のプロジェクトのスタッフに採用され、バニャ・ルーカに戻った。カリタスはカトリック教会の司教座



写真23 バニャ・ルーカ社会教育センター



写真24 センター長のイーゴル・ルケンダ氏(左)と教務主任のゾーリッツァ・ヴヤノヴィッチ医師

に附属する福祉事業組織である。

彼の場合には兄と同様にオーストリアで就職するという選択肢もあったが、カトリック教会の事業を手伝い、それを通して故郷のクロアチア人の役に立ちたいという気持ちを強くもっていた。そこでバニャ・ルーカの司教コマーリツァに手紙を書き、その思いを伝えた。その結果、カリタスのプロジェクトに応募を勧められ、スタッフとして採用された。2011年にオーストリア政府とカリタスの助成により高齢者介護スタッフを養成する専門学校がバニャ・ルーカで初めて創設された。これが「バニャ・ルーカ社会教育センター」であり、彼はその所長に任命された。

この専門学校の校舎はカリタスが所有する敷地に新築で建設された。3階建ての建物の内部には講義室や実習室が配置されている。学生定員は25名、在学期間は1年間、280時間の実習を含めて500時間の授業を受け、修了証書を取得する。オーストリア政府とカリタスからの助成があるために、学生が支払う授業料は年間250KM (=125ユーロ)と非常に低額に抑えられている。助成がなければ授業料は6倍くらい徴収しなければ採算がとれないとルケンダ氏は述べる。そのため、毎年定員を超える応募があり、書類選考により学生の選抜をしている。しかし、最大の問題は卒業生の就職である。2013年の時点で2学年50人の卒業生が出たが、常勤の職に就いた者は2名に過ぎない。しかもその一人はこの学校のアシスタントを務める。残りの者は施設や個人の依頼に応じて時間給で介護サービスを提供しているが、その仕事に比べ給与水準は高くない¹⁴。ボスニアでは高齢者介護のスタッフが専門職として十分に認知されていないことが大きな問題であり、まず国家機関、とくに病院や介護施設がこの学校の卒業生を常勤職員として採用し、その有用性を示してもらう必要があるとルケンダ氏は述べている。

オーストリア政府の資金援助は2014年度までであり、その後はそれまでの事業成果を見て延長するかどうかを判断する。しかし、高齢社会化を背景に介護スタッフのニーズは高まっているので、今後も事業を継続できる見込みは大きいとルケンダ氏は述べる。ルケンダ氏自身は学校の管理

者であり、教務の責任者はゾーリツァ・ヴヤノヴィッチ(1965年生)氏、セルビア人の女医である。学校の常勤職員は4人であるが、クロアチア人はルケンダ氏のみである。しかし、彼によれば、ここではスタッフは民族帰属をまったく意識せずに、共通の目的のために仕事をしている。スタッフと学生との関係および学生同士の関係も同様でも民族帰属が意識されることはない。なおルケンダ氏はカリタスで働くチェコ人の女性と2005年に結婚し、一男(2006年生)と一女(2008年生)をもつ。

3-2 バニャ・ルーカ農村部、バスターシのボシュニャク人

バスターシ(Bastasi)は市内の中心部から南東へ16キロ離れた山間の農村である。内戦前(1991年)の人口は493人、民族構成はボシュニャク人が300人(60.3%)、セルビア人が167人(33.7%)、その他26人であった。バニャ・ルーカでは唯一のボシュニャク人が多数派の農村であった。この集落について強調すべきことは大変分かりにくい場所にあることである。幹線道路から当地に向かう山間には迷路のように砂利道が縦横に走り、少し行くと分かれ道に遭遇する。バニャ・ルーカに住む地元のボシュニャク人の案内者でさえ、訪問するたびに道に迷うほどである¹⁵。

1992年の内戦開始後、このような辺鄙な農村に対してもセルビア人勢力は民族浄化を敢行し、ボシュニャク人住民を強制的に追い出した。80戸余あったボシュニャク人の住宅はすべて放火され、打ち壊された。現在、そのうち19戸が再建されている。しかし、住人が常住している世帯は4軒、人口は10人に過ぎない。そのうち、2軒の住民に話を聞くことができた。

その一つはまだ若いビラノヴィッチ兄弟である。兄は当年32歳のカディール・ビラノヴィッチ(Kadir Bilanović, 1981年生)、弟は当年29歳のズラタン・ビラノヴィッチ(Zlatan Bilanović, 1984年生)である。彼らは内戦が始まった1992年には初等学校に通う生徒であった。

内戦前、彼らの住宅では両親と7人の兄弟姉妹

が一緒に住んでいた。内戦中、一家は1992年から3年間はバニャ・ルーカから南東に100キロ離れたトラヴニク (Travnik) に、1995年からはバニャ・ルーカから西に57キロ離れたサンスキー・モスト (Sanski Most) に避難していた。いずれもボシュニャク人が支配する典型的な避難地域である。2000年7月に帰還、助成金を獲得し、住宅を再建した。両親はすでに死亡、4人の兄と1人の姉はサンスキー・モストに居住している。

2010年3月に訪問したときには母親が存命であった。彼女は月に160KMの年金 (=80ユーロ、父親の遺族年金) を受給し、家計を助けていた。しかし、糖尿病を患っていた母親は2011年6月に死亡した。そのため、ビラノヴィッチ兄弟の収入源は現在、農業のみである。野菜や果樹などの農

作物をバニャ・ルーカ市内の青空市場で販売し、現金収入を得ている。内戦前、ビラノヴィッチ一家は15ヘクタールの農地と山林を所有する裕福な農家であった。したがって、農地は十分にある。足りないのは耕作機械である。何よりもトラクターがないので、牛と人力で耕作している。だから、所有する農地を有効に利用できていない。しかし、資金がないのでトラクターを購入できない。外国の援助による寄贈の機会を待っているという。

この村にはセルビア人も住んでいる。セルビア人の世帯は現在40戸ほどである。その中には昔から付き合っている者もいる。親しいセルビア人住民の中には外部のセルビア人勢力がボシュニャク人の住宅を破壊に来ることを彼らに知らせ、早



写真25 バスターシに残留するボシュニャク人兄弟、右が兄のカディール・ビラノヴィッチ、左が弟のズラタン・ビラノヴィッチ



写真27 バスターシのボシュニャク人帰還者の住宅



写真26 再建されたビラノヴィッチ兄弟の住宅、この写真の撮影時 (2011年3月) にはまだ母親が存命であった。



写真28 ベシーマ・シャラノヴィッチさんとその住宅

く逃げ出すように助言した者もいた。その一方でセルビア人勢力に加担し、ボシュニャク人の住宅を破壊し、彼らの財産を略奪した住民もいる。誰が何をしたかはよく覚えている。ビラノヴィッチ兄弟はそのような住民とは今も口をきかない。出会ったときにはお互いに無視している。彼らにいわせると「壁が歩いているようなもの」である。

もう1軒の世帯はシャラノヴィッチ一家である。ボシュニャク人の帰還者の中で彼らは唯一、学校に通っている子どもがいるとビラノヴィッチ兄弟は教えてくれた。シャラノヴィッチ一家はビラノヴィッチ兄弟の住宅からさらに1キロ離れ、バスターシの最奥部にある。応対してくれたのはベシーナ・シャラノヴィッチ (Besina Šaranović、1969年生) という婦人。一家は夫婦と子どもが二人の核家族である。夫はサバフディン (Sabahudin Šaranović、1970年生)、長男アンブル (Anbl、1995年生)、次男アドナン (Adnan、2001年生)。訪問した当時、長男はバニャ・ルーカの中等学校に通い、次男は初等学校に通っていた。

ベシーナさんはサンスキー・モストの出身、内戦中にトラヴニクに避難していたときに夫と知り合い結婚、2001年に夫の出身地のバスターシにやってきた。住宅は帰還した2001年に助成金を得て再建したが、その後2年間は電気がなかった。元々水道がない地域であり、毎日湧き水を水源とする貯水池に水をくみに行っている。夫妻は共に無職であり、現在の主要な収入源は農業である。土地を耕作する他に牛を3頭、羊を3頭飼育している。かなりの広さの土地を所有しているが、耕作機械がないため、農地として十分に利用できていない。今一番困っていることは子どもの教育費の捻出だと述べる。とくに長男はバニャ・ルーカの中等学校に通っているので通学費を含めてお金がかかるという。

バスターシは非常に不便な農村である。バニャ・ルーカに向かう幹線道路に出るためには4キロ半の山道を進まなければならない。街灯がないので夜間は暗闇になる。ビラノヴィッチ兄弟にせよ、シャラノヴィッチ一家にせよ、幹線道路に出るためにはこの山道を下らなければならない。内戦前、バスターシには4年次までだが初等学校が存在し

た。しかし、それは内戦中に破壊され、近年に精神患者の療養施設に建て替えられている。そのため、シャラノヴィッチ一家の子どもは毎日この山道を歩いて通学している。兄はバス停まで5キロ歩く必要があるという。もっとも、この点ではバスターシとその近郊に住むセルビア人住民の子どもも同じ条件である。

4 コートル・ヴァロシュのボシュニャク人およびクロアチア人

4-1 コートル・ヴァロシュの非セルビア人に対する民族浄化

コートル・ヴァロシュ (Kotor Varoš) はボスニア北部に位置し、バニャ・ルーカの南東に隣接する基礎自治体である。バニャ・ルーカ中心部からの距離は約40キロであり、自動車での移動時間は1時間弱。コートル・ヴァロシュからバニャ・ルーカに通勤・通学する者は今も多い。内戦前のコートル・ヴァロシュの特徴はセルビア人、ボシュニャク人、クロアチア人の主要三民族の人口が拮抗していたことである。1991年の人口は36,853人、民族構成はセルビア人14,056人 (38.1%)、ボシュニャク人11,090人 (30.1%)、クロアチア人10,695人 (29.0%)、ユーゴスラヴィア人745人 (2.0%)、その他267人であった。セルビア人は相対的多数であるが、全体では非セルビア人が多数であった。しかも町の中心部ではクロアチア人が多数を占めていた。

旧ユーゴスラヴィアでは1990年に最初の複数政党制による選挙が国政レベルと地方レベルで実施されたが、コートル・ヴァロシュの地方議会選挙では政党別の得票率がセルビア民主党 (SDS) 36%、クロアチア民主同盟 (HDZ) 31%、ボシュニャク人の権益を代表する民主行動党 (SDA) 30%と拮抗していた。そのため、基礎自治体の政治は当初、三民族を代表する政党の連立政権が担っていた。町の首長はクロアチア人が務めていた。

しかし、セルビア人勢力はこの状況に満足せず、クーデターによる町政の篡奪を計画した。1992年6月11日、旧ユーゴスラヴィア人民軍の所属部

隊やセルビア民主党所属の民兵組織などから構成されたセルビア人武装勢力は町の中心部に兵力を展開し、コートル・ヴァロシュの要所を制圧した。彼らは町の首長を筆頭にボシュニャク人やクロアチア人の要職者や富裕者を次々に拘束し、警察の監獄や仮設の収容所に監禁した。セルビア人勢力はすべてのボシュニャク人やクロアチア人の住民に対し、武器の提出を命じた。その上で旧ユーゴスラヴィア人民軍の部隊を中心とする武装勢力はボシュニャク人とクロアチア人の集落に攻撃を開始し、住民の追い出しを開始した。

この結果、1992年11月にはコートル・ヴァロシュに居住していた非セルビア人のほとんどが強制的に追い出されることになった。また1992年6月から1995年12月までに408人の非セルビア人が犠牲になった。その大半はボシュニャク人である。加えて今も280人の非セルビア人が行方不明になっている。うち251人はボシュニャク人であり、29人はクロアチア人である¹⁶。ボシュニャク人とクロアチア人の住宅の大半は略奪された上で放火されたり、打ち壊されたりした¹⁷。

4-2 コートル・ヴァロシュ、ヴェーチッチのボシュニャク人

最初に訪問した場所はヴェーチッチ (Večići) という集落。コートル・ヴァロシュの中心部から南へ9キロ離れた農村である。内戦前 (1991年) の人口は1744人、民族構成はボシュニャク人1110人 (63.6%)、セルビア人409人 (23.5%)、クロアチア人221人 (12.7%)、その他4人 (0.2%)。人口センサスの数字ではセルビア人やクロアチア人も住んでいることになっているが、これは集計の単位の中にセルビア人およびクロアチア人の農村が含まれたためであり、ヴェーチッチはほぼ純粋にボシュニャク人が居住する農村である¹⁸。

内戦中、コートル・ヴァロシュの中でヴェーチッチの住民は最後まで村内に残り、抵抗を続けたで知られている。セルビア人武装勢力は投降を呼びかけたが、ヴェーチッチの住民はこれを拒否した。彼らは武器を手にし、頑強に抵抗した。そのため、セルビア人勢力から容赦のない攻撃を受けた。セ

ルビア人勢力は戦闘機で爆撃し、地上からは砲弾やロケット弾を浴びせた。1992年11月3日、村内に残っていた500人の住民はこれ以上の抵抗はもはや不可能だと判断し、脱出を試みた。目的地は南西に80キロ離れたトラヴニク (Travnik)。ボシュニャク人武装勢力が制圧していた町である。しかし、全員が無事に村から脱出できなかった。村を包囲していたセルビア人武装勢力は約200人を捕捉し、近くの集落グラボヴィツァ (Grabovica) の小学校の校舎に連行した。そこで彼らは163人の捕虜を殺害したとされる。彼らの遺体はどこかに埋められているはずであるが、これまで6体しか発見されていない。この事件は事実だとすれば明らかに戦争犯罪であった。しかし、この事件は内戦後も事件として取り上げられず、まったく捜査がなされていない。20年を経過した今も一人の容疑者の名前も明らかになっていない。そのため、住民は今も大きな憤りを感じている。毎年11月3日には大規模な抗議集会が開催されているほどである。とくに警察や政府の不作为に対し強い不満がある¹⁹。

このように悲惨な過去をもつヴェーチッチであるが、今日では復興が著しい。内戦時に破壊された住宅や建物は外見上、完全に再建されている。集落の中を見て回っても、かつてここが激しい攻撃の標的となり、村全体が廃墟になっていたとは想像が付かない。内戦前にヴェーチッチには約350戸のボシュニャク人の住宅があった。それらは1992年11月までにセルビア人勢力によって徹底的に破壊されたといわれるが、現在ではほぼすべてが再建されている。きれいで大きな住宅が多い。集落の中には近年に再建された立派なモスク (Džamija、イスラム教の礼拝施設) が二つもある。

モスクのそばにある真新しい住宅に住むイマーム (Imam、イスラーム導師) は、当年30歳のエクレム・ホージッチ (Ekrem Hodžić、1983年生) 氏である。ホージッチ氏は、 Dayton 和平協定によってセルビア人共和国とボスニア連邦の共通領土となり、国際社会の管理下に置かれている北ボスニアのブルチコ (Brčko) に生まれた。彼はサライエヴォのイスラーム神学校を卒業後にエジプトのカイロ大学に留学、2010年にこ

のモスクのイマームとして赴任した。家族はボスニア連邦のトゥズラ（Tuzla）出身の妻サーナ（Sana、1991年生）の間に一子（長男のムハメッドMuhamed、2012年生）がある。モスクは外国

からの援助ではなく、この集落の住民の寄進によって再建されたという。

ヴェーチッチでは村のリーダーであるザヒード・ボータイチ（Zahid Botić、1955年生）氏に



写真29 ヴェーチッチのモスク、階段下に湧き水の水汲み場がある



写真32 ヴェーチッチ集落のリーダーのザヒード・ボータイチ氏



写真30 モスクの中にある石碑、内戦中に死亡および行方不明になった集落住民の氏名を刻んでいる。



写真33 きれいに再建されたヴェーチッチの住宅



写真31 イスラーム導師のホジッチ氏



写真34 ヴェーチッチの住民が飼っている羊

話を聞くことができた。ポーティッチ氏は内戦前にコートル・ヴァロシュから北に80キロ離れたグラディシュカ (Gradiška) の建設会社ジダール (Zidar) で20年間働き、運転手をしていた。内戦中はボシュニャク人勢力の戦闘員となり、最後までヴェーチッチに残り、セルビア人武装勢力と闘った。1992年11月3日の脱出作戦ではセルビア人武装勢力の包囲網をくぐり抜け、トラヴニクに逃れた。1999年にヴェーチッチに帰還、2001年に助成を得て住宅を再建した。

家族構成は後妻のエニサ (Enisa、1960年生)、長女アディーサ (Adisa、1976年生)、次男アディズ (Adiz、1980年生)。1974年生まれの子長男アディズ (Adis) は1992年11月の脱出時にセルビア人武装勢力に拘束され、行方不明になった。長女のアディーサは村内の男性と結婚し、2人の子どもをもつ。次男のアディズは2012年にスイスに移住し、そこで働いている。

ポーティッチ氏によれば、避難した住民の80%はその後に帰還し、ボシュニャク人の現在の人口は1000人を超えているという。これは内戦前の人口の90%に当たる。

これまで集落の最大の問題は水道が復旧していないことであった。住民は井戸や湧き水を生活用水として利用していた。そのため、場所によって住民は大変な不便を強いられていた。たとえば、モスクの建物の下に湧き水の汲み場があるが、水を入れたポリタンクをここから自宅まで運ぶのは大変な力仕事となる。それゆえ、2012年9月にこの集落を最初に訪問したときには私は大勢の住民に取り囲まれることになった。彼らがこぞって述べたことは日本の援助で水道を建設して欲しいということであった。しかし、その半年後 (2013年3月) の訪問時には状況が変わっていた。2012年11月に基礎自治体の議会でヴェーチッチに水道管を敷設することが決定され、2013年末か2014年初めには町の水道が利用できるようになる予定になっていたからである。最初の訪問時には険しい表情で窮状を訴えたポーティッチ氏は二度目の訪問時には非常に柔和な顔で私を迎えてくれた。水道が通った後に残る問題は所々に陥没がある道路の舗装であるという。

住民の主な生計手段は農業と牧畜である。どの家も穀物と牧草を栽培し、牛、羊、にわとりなどを飼育している。農業に関しては機械化が遅れていることが最大の障害である。とくに耕作機械の不足が甚だしい。内戦前に村内の住民は約120台のトラクターを所有していたが、現在は3台しかない。農業用の機械を購入する資金がないためである。

4-3 コートル・ヴァロシュ、ヴルバニチのボシュニャク人

コートル・ヴァロシュではもう一つのボシュニャク人の集落を訪問した。ヴルバニチ (Vrbanjci) という名の集落である。ただし、ヴェーチッチのように純粋にボシュニャク人の村ではなく、クロアチア人やセルビア人も一定の割合で住んでいたところである。内戦前 (1991年) の人口は2975人、ボシュニャク人1468人 (49.3%)、クロアチア人799人 (26.9%)、セルビア人658人 (22.1%)、ユーゴスラヴィア人41人 (1.4%)、その他9人。

インタビューに応じてくれたのはジヤード・スマイロヴィッチ (Zijad Smajlović、1947年生) 氏。家族構成は妻ジュリャーダ (Đuljada、1952年生)、長女エディータ (Edita、1971年生)、長男セロヴェディン (Selovedin、1974年生)、次男ミルザード (Mirzad、1982年生)。

内戦前にスマイロヴィッチ氏はコートル・ヴァロシュの基礎自治体の職員であった。22年間、ヴルバニチの支所に勤務し、残りの3年間はコートル・ヴァロシュの役場で住民台帳の管理の仕事に従事していた。1992年6月にセルビア人勢力が町の権力を奪取すると、他のボシュニャク人の同僚と共に拘束され、収容所に入れられた。18日間後に収容所から解放された。しかし、自宅に帰ってみると、住宅は略奪され、放火されていた。身の危険を感じたスマイロヴィッチ氏は家族と共に周辺の地域で逃亡生活を送った。1993年1月にコートル・ヴァロシュを脱出、クロアチア北部の町クラピナ (Krapina) に一時滞在した。その後、1994年1月にクロアチアとの故郷に近いスロヴェニアのノヴォ・メスト (Novo Mjesto) に移動し、

避難生活を送った。1999年にデンマーク政府の助成金を得て住宅を再建、ヴルバニチに帰還した。その後ずっと失業状態であったが、近年に年金の受給資格を得た。毎月240マルク(120ユーロ)の年金を得ている。

スマイロヴィッチ氏は8ヘクタールの農地を父親から受け継いでいる。しかし、トラクターなどの耕作機械がないので、ほとんどの部分を利用してきていない。住宅の裏地の菜園で自家消費用のトウモロコシ、ジャガイモ、トマト、果樹などを栽培する程度である。

父親は農民であり、耕作と牧畜で生活を立てていた。また広大な果樹園をもち、毎年2000リットルのラキヤ(すももや梨を原料とした焼酎)を製造し、販売していた。

スマイロヴィッチ氏の子どもは内戦後にすべて村から出て行き、現在は夫婦だけで暮らしている。長女は結婚し、ボスニア連邦のビハーチ(Bihac)に住み、子どもが3人いる。しかし、その夫はオーストリアに出稼ぎに行き、土木作業員の仕事に従事している。長男はスロヴェニアに住み、土木作業員として働いている。また結婚し、2人の子どもがある。次男はスウェーデンのストックホルムに移住し、電車の運転手をしている。彼も結婚し、1人の子どもがある。国外で働く長男と次男は親元に定期的に仕送りをし、両親の家計を助けている。

村内のボシュニャク人は90%が帰還し、住宅を再建している。しかし、実際にこの村に常住して

いる者は10%程度であり、すべて高齢者である。この村では企業や公共セクターで働く給与生活者は一人もいない。若干の自営業者(自動車整備と飲食店経営)を除くと、働いている者はすべてコートル・ヴァロシュの外、とくにボスニアの外に出ている。たとえば、スマイロヴィッチ氏の3人の兄弟は内戦中にすべて国外に移住し、そこで就職した。兄(1941年生)は内戦前に食料品を商店に卸売りする自営業者であったが、ノルウェーに移住し、魚の加工会社に就職した。すぐ下の弟(1958年生)はスウェーデンのストックホルムに住み、郵便切手の製造工場で働いている。一番下の弟(1965年生)はオーストリアに移住し、運輸会社の運転手として働いている。また妹(1951年生)は村内のボシュニャク人と結婚したが、内戦中に夫と共にアメリカに移住した。ヴルバニチで住宅を再建しても、常住しない者が圧倒的に多いのは彼らがすべて村から遠く離れた場所に仕事と住宅をもっているからである。

現在、村内外のセルビア人住民とはまったく問題は無い。治安もよく、何か事件が起こればすぐに警察が来てくれる。だから安心して暮らしている。このようにスマイロヴィッチ氏は述べる²⁰。

その他に重要な点としてはヴルバニチではボシュニャク人の居住地であるにもかかわらず、インフラストラクチャが破壊されなかったことである。電気と水道は帰還後にすぐに使えた。これはこの村が幹線道路に近く、またセルビア人も住



写真35 ヴルバニチのボシュニャク人残留者ジャー
ド・スマイロヴィッチ氏



写真36 再建されたが常住者がいないスマイロ
ヴィッチ氏の兄の住宅、右はスマイロヴィッチ氏の
住宅

んでいるので、ここのインフラを破壊するとセルビア人住民の生活にも支障が出るためであった。

この村では内戦前の時期に各世帯が3000マルクを拠出し、町から水道を引いた。これに対し、先に紹介したヴェーチッチでは井戸や泉があったのでボシュニャク人の住民は水道の敷設にお金を使おうとはしなかった。むしろ彼らは敬虔な信者であったので、余裕資金をイスラームのジャーミヤに寄付していた。しかし、近年になって干ばつが続いてヴェーチッチでは井戸や泉の大半が枯れてしまった。そのため住民にとって上水の確保が死活問題になり、町からの水道を引き入れることが必要になった。だがそのときには集落の住民は経済的な余裕がなく、自力で水道を引けなくなっていた。彼らが援助を渴望していたのはそのためである。このようにスマイロヴィッチ氏は背景的な事情を説明してくれた。

なお内戦前にはヴルバニチにはクロアチア人も一定数住んでいた。しかし、スマイロヴィッチ氏の話では彼らのほとんどは集落を去ったまま帰還していない。住宅を再建した者もいるが、定住者はほとんどいない。近隣に住むクロアチア人の定住者はセルビア人と結婚した女性のみであるという。スマイロヴィッチ氏の住宅から200メートル

ほど奥に進んだ場所に再建されたカトリック教会の聖堂を発見したが、教区の聖職者（župnik）はこの教会に常住していない。カトリックの祝日で何か宗教的な行事があり、他の地域に去ったクロアチア人の住民が一時的に集まるときにだけ、町の中心部にある教会から司祭がミサをするためにやってくるという。

4.4 コートル・ヴァロシュのクロアチア人

すでに述べたように内戦前、コートル・ヴァロシュでは人口の約3割、10,695人のクロアチア人が住んでいた。しかし、1992年6月にセルビア人勢力が町政権力を奪取した後はボシュニャク人に劣らず、クロアチア人もまた厳しい民族浄化の標的になった。

私は2012年3月にコートル・ヴァロシュの基礎自治体（オープンシュティナ；opština）を訪問し、クロアチア人の政治家に面会した²¹が、その際にクロアチア人に対する民族浄化の状況をよく示す統計資料を入手した。クロアチア人が居住する地区について、内戦の期間中にどれだけの住宅が破壊され、どれだけ人口が減ったかを示す資料である（表2）。これによると、内戦の期間中に全体

表2 コートル・ヴァロシュのクロアチア人集落における内戦に伴う住宅破壊と住民の減少

集落名	1992年初めの状況			2000年の状況				2011年末の電力の復旧
	クロアチア人の比率	世帯	人口	住宅を破壊された世帯	人口	住宅再建の申請件数	住宅を再建した世帯	
バシュティナ (Baština)	98.9	77	443	71	5	3	3	○
ビリツェ (Bilice)	93.7	81	474	81	0	4	0	×
ドゥラトフツィ (Duratovci)	88.5	70	445	70	1	7	4	×
ヤコティナ (Jakotina)	74.9	91	520	91	0	0	0	×
ソコリーネ (Sokoline)	98.6	87	497	87	0	3	2	×
ヴィシェヴィツツェ (Viševice)	98.3	71	366	71	0	0	0	×
シーボヴィとノヴォ・セロ (Šibovi-Novo Selo)	95.4	148	640	47	16	10	5	○
ポドゥブルジェ (Podbrđe)	96.1	140	745	15	53	10	2	○
ザーブルジェ (Zabrđe)	97.8	201	1129	41	46	19	7	○
プリツカ (Plitka)	98.8	82	655	82	0	0.5	4	×
オラホヴァ (Orahova)	68.7	145	1107	139	0	0.5	1	×
ヴルバニチ (Vrbanjci)	26.9	137	799	124	19	26	11	○
コートル・ヴァロシュ中心部	32.8	364	2432	169	137	60	18	○
計		1694	10695	1088	277	143	57	

出所：Pregled naselja i sela naseljenih Hrvata prije rata I poslije rata 1992–2000 godine Opština Kotor Varos, コートル・ヴァロシュ基礎自治体議会附属社会的監察委員会委員長マト・ロヴレノヴィッチ氏所有の内部資料。

注：プリツカとオラホヴァの住宅再建申請件数は両地区にまたがる世帯が1件ということで、それぞれ0.5とした。2011年末の電力復旧はマト・ロヴレノヴィッチ委員長からの聞き取りの結果による。

ではクロアチア人の住宅は実に76%が破壊された。13の地区の中で7つの地区ですべての住宅が破壊され、2000年の時点で6つの地区で住民の数がゼロになった。全体でもクロアチア人の人口は2000年に277人、内戦前の3%弱の水準にまでに減少してしまった。

その後もクロアチア人の帰還は著しく遅れている。その後のクロアチア人の人口についてはデータがないので、カトリック教徒の数で代表させると、2013年2月のバニャ・ルーカ司教座の発表では、コートル・ヴァロシュの3つの教区（コートル・ヴァロシュ、ソコリーネ、ヴルバニチ）に住むカトリック教徒の人口は272人であった。内戦前の1991年には3教区のカトリック教徒の人口は10165人であったから、2012年の人口は1991年の2.7%にすぎない²²。別の記事によると、コートル・ヴァロシュ全体では内戦中に約1300のクロアチア人の住宅と集合住宅が破壊されたが、再建された物件は275にすぎない。そのうち助成金によって再建された住宅は107、住民が自身の資金によって再建した住宅が165、その他が3である。クロアチア人の集落は電力施設や通信、水道、道路の舗装などのインフラストラクチャーの再建が遅れている。このことがまた住民の帰還を遅らせる要因になっている²³。

4-5 コートル・ヴァロシュ、プリツカのクロアチア人

コートル・ヴァロシュでは2012年3月の時点で17のクロアチア人集落のうち、7つに電気が復旧していなかった。2012年7月にその一つを訪問する機会があった。プリツカ（Plitska）という集落である。中心部から西へ7キロ離れた農村地帯にある。内戦前（1991年）の人口は663人、うちクロアチア人は655人（98.8%）、純粋にクロアチア人で占められた農村であった。1992年10月にセルビア人武装勢力の攻撃を受け、8人の住民が死亡、残りのすべての住民は集落から追い出された。住民が去った後に彼らの住宅はすべて略奪され、破壊され、放火された。プリツカはその後に帰還した住民は一人もなく、無人の廃墟となって

いた。電力施設が破壊されたままであり、住宅を再建しようとする住民がいなかった。しかもそこには悪循環があった。帰還した住民がまったくいないので需要がない。そのため、電気の復旧のための予算や助成金が配分されず、電気の復旧は先送りにされた。それがまた元の住民の帰還の意欲を挫いていたからである。

しかし、地元のクロアチア人の粘り強い陳情の結果、2011年にセルビア人共和国の難民・避難民担当省（Ministarstvo za izbjeglice i raseljena lica RS）はコートル・ヴァロシュのクロアチア人帰還のために80,000KM（約520万円）の予算を配分した。これを利用してプリツカに電線の延長工事が実施された。2012年7月20日、近くの発電所からプリツカの変電所に電流が送られ、20年ぶりに集落に電力が復旧した。当日は近隣のクロアチア人住民が集合し、祝典が開かれた。私は偶然この日にプリツカを訪れたので、住民の喜ぶ姿を目の当たりにすることができた²⁴。

電力の復旧に呼応してプリツカに帰還したクロアチア人住民がいた。イリヤ・ペトロヴィッチ（Ilija Petrović、1956年生）とマルコ・ペトロヴィッチ（Marko Petrović、1960年生）の兄弟である。1992年にプリツカを追い出された後、二人はクロアチアのザグレブに避難し、兄は左官職人、弟は建設作業員として働いてきた。妻子はまだザグレブにいるが、子どもはすでに成人に達した。今後は近隣の住民の力も借りて住宅を再建し、プリツカに居住すると予定だと述べた²⁵。

4-6 コートル・ヴァロシュ、シーボヴィのクロアチア人

コートル・ヴァロシュではもう一つのクロアチア人の集落を訪問した。シーボヴィという名の集落である。シーボヴィ（Šibovi）は町の中心部から北へ3.6キロの農村。内戦前（1991年）の人口は671人、うちクロアチア人は640人（95.3%）であった。

集落を案内してくれたのはイリヤ・マリッチ（Ilija Marić、1940年生）氏である。内戦前にマリッチ氏はシーボヴィの農業組合の理事長を務めてい

た。10ヘクタールの農地を所有し、富農とってよかった。今でも集落の顔役のような存在である。セルビア人との関係は悪くなかったためマリッチ氏は内戦中もシーボヴィに残留していた。しかし、内戦末期の1995年にクロアチアのプラシュキ (Plaški) に避難、2000年にシーボヴィに帰還した。彼は2000年からコートル・ヴァロシュの基礎自治体議会の議員を3期務め、2008年からは議会の副議長を務めた。2012年の選挙には立候補せず、引退した。

シーボヴィもまた内戦中に徹底的に住宅を破壊されたところであり、集落のあちこちには土台だけになった住宅の残骸を見かけた。しかし、シーボヴィは比較的多くのクロアチア人が帰還した地

区である。それでも帰還し、住宅を再建した家族は30軒程度に過ぎない。しかも、平日に集落の中にいるのはマリッチ氏を含めてすべて年金生活者であり、10人程度に過ぎない。勤労世代の年齢の者はクロアチアで働き、週末にのみ自宅に帰ってくる。マリッチ氏の息子はすべてシーボヴィを出て、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの別の町ないしクロアチアで働いている。

マリッチ氏はこう述べる。「民族間の敵対関係はもはやない。帰還者も地元住民も同じ問題に直面している。それは就職難と将来に展望がないことである」。

このような地区であるが、その中で「シーボヴィの奇跡」といわれる事物がある。それは「シム・



写真37 かつてのクロアチア人の集落プリツカに新規に敷設された電線の最後の電柱



写真39 電線敷設完成の記念式典後にマルコ・ペトロヴィッチ氏の住宅の中で開かれた昼食会。近隣に住むクロアチア人が出席。写真手前の人物が民族評議会議員のドラガン・ユリチェヴィッチ氏。



写真38 プリツカ集落に帰還したクロアチア人兄弟、兄のイリヤ・ペトロヴィッチ氏(右)と弟のマルコ・ペトロヴィッチ氏



写真40 まだ再建されていないイリヤ・ペトロヴィッチ氏の住宅

「シム・テフニク (SIM-Tecnik)」というクロアチア人の帰還者が創設した企業である。

創業者はステイーポ・マリッチ (Stipo Marić)、

イーヴィツァ・マリッチ (Ivica Marić)、ミーレ・マリッチ (Mile Marić) のマリッチ三兄弟。彼らは共同出資で2007年にこの会社を設立した。機



写真41 草むらに残る破壊されたシーボヴィのクロアチア人住宅の残骸



写真44 シーボヴィのクロアチア人帰還者が創業した機械部品工場、シム・テフニクの内部



写真42 シーボヴィに残留するクロアチア人、コートル・ヴァロシュ議会元副議長のイリヤ・マリッチ氏とその妻のマラ



写真45 工場内を案内してくれたセルビア人の技師ムラーデン・カラマンダ氏



写真43 再建されたが平日に常住者がいないシーボヴィのクロアチア人の住宅



写真46 シム・テフニクの作業中の従業員

械部品を製造。兄弟の名前のイニシャルを合わせてSIM-Technikという社名にした。

彼らはイリヤ・マリッチ氏の弟（Lukice Marić）の子ども、つまりイリヤの甥に当たる。シーボヴィを追われた後、三兄弟はドイツに渡り、ミュンヘンやシュトゥットガルトで働いた。ドイツで協力者を得て資本の供与を受け、シーボヴィに帰還し、この会社を設立した。2013年現在、80人余の従業員を雇用している²⁶。彼らはクロアチア人のみならず、コートル・ヴァロシュの帰還者の中でもっとも経済的に成功を収めている人びとである。

5 マイノリティ帰還者の残留を支える要因

マイノリティ帰還者はどのような条件の下で元の居住地に残留しているのか。彼らの残留を支える要因は何か。調査を通して私が考えるに至った事柄を記し、本稿のまとめとしたい。

まず基本的な要因として二つの事柄がある。第1に生命と財産の安全が保障され、住民が安心して暮らせることである。このことは当たり前のことだが、内戦終結後の数年間は決して当然のことではなかった。マイノリティ住民が元の居住地に戻ったときにマジョリティ勢力の側から暴力や脅迫・嫌がらせを受けることが各地で頻発していたからである。その場合に地元の警察はマジョリティ側の暴力行為を取り締まらず、事実上黙認していることが多かった。マイノリティ住民に対する犯罪は放置され、たとえ殺人事件が起こっても、警察は真剣に捜査をせず、一人の容疑者も逮捕されないこともあった。そのため、戦争が終わったにもかかわらず、マイノリティ住民の新たな追い出しが発生したり、元の居住地に帰還したマイノリティ住民がマジョリティ勢力の側からのハラスメントに耐えかねて再び避難地に戻っていったことが報告されている²⁷。

内戦終結から18年が経過した現在、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの治安は完全に回復している。かつて蔓延したナショナリズムの狂気は消え去り、人びとの思考はノーマルな状態に戻った。公安当局は公共の秩序の維持に尽力し、マイノリ

ティ住民も生命や財産に危険を感じず、安心して暮らせるようになっている。このことはどこへ行っても実感されることである。たとえば、コートル・ヴァロシュのボシュニャク人のスマイロヴィッチ氏が「何か事件が起これば警察はすぐに来てくれる。だから安心して暮らしている」と述べていることはきわめて象徴的である。

基本的な要因の第2は生活基盤である。これはさらに二つに分けられる。一つは住居とインフラストラクチャである。ボスニア内戦では民族浄化、すなわちマイノリティ住民の追い出しは必ずといってよいほど彼らの財産の略奪と住宅の破壊、ならびにその居住地域のインフラストラクチャの破壊を伴った。追い出された住民が戻ってきても生活ができないようにしておき、彼らの帰還の意欲を挫くためである。屋根や壁が打ち壊され、寒さや雨露を防げない状態では持続的に居住できない。それゆえ、帰還したマイノリティ住民はまず住宅の再建に着手し、次いで電力や通信、水道、道路などインフラストラクチャの復旧を待つのが通常のパターンであった。

もう一つは生計の手段である。これは帰還者が定住するためには不可欠の条件である。たとえ住宅を再建できたとしても、そこで生活が成り立たなければ住み続けることができない。それゆえ、元の居住地に残留するマイノリティ住民は何らかの形で生計の手段をもっている。一般的にはそれは高齢者の場合には年金であり、勤労世代の場合には何らかの職業である。もっとも、職業といっても、調査事例が示すように、マイノリティ住民の中では常勤の被雇用者は非常に少なく、何らかの自営業、とくに農業で生活の糧を得ている者が多い。

しかし、マイノリティ住民の残留はこれらの二つの要因だけで支えられているのではない。彼らの話を聞き、また実際の行動を観察していると、プラスアルファの要因がいくつかあるように思われる。ここではこれを「付加的な要因」と呼びたい。

その一つはある種の「生活上のたくましさ」ないし「ヴァイタリティー」と呼ぶべきものである。それはいいかえると、生き延びるためには（犯罪は別として）何でもやる意欲と能力である。難民

の帰還地域では企業の従業員や公共セクターの職員など常勤の仕事に就職できたマイノリティ住民はごく少数である。むしろずっと失業状態にある人が非常に多い。高齢者が受給する年金の多くはそれだけで生活できる金額ではない。農業を専業とする人びとの場合でも耕作機械や設備がなく、思うように経営や生産を拡大できず、収益を上げていない農家が多い。それでも彼らは何とか生き延びている。ここが実に不思議な点である。しかし、何か秘密があるわけではない。それぞれの家庭が自助努力と生活の工夫を積み重ねることが生き残りの基本策である。

たとえば、安定した仕事を失った場合には何か自営のビジネスを開業する。ボサンスコ・グラホヴォのビルビヤ氏（アンテナや電気の配線業）やコヴァチェヴィッチ氏（木工細工業とガラス屋）が典型的な事例である。実家が農家の場合には畑や果樹園をもち、自家消費用の野菜や果樹を作る。またわずかでも牛や豚、にわとりなどを飼育し、食肉やミルク、卵などを自給している。実家が農家でなくとも住民は庭先に家庭菜園を作り、野菜や果樹、ジャガイモなどを栽培する。酒類も「ラキヤ」と呼ばれる焼酎はたいてい自家製である。こうして彼らは食糧をできるだけ自給し、飲食費を節約する。日常の食事も質素である²⁸。他方で親世代の年金や自営業、臨時の仕事からの収入など小さな所得を積み上げ毎月の生活費を捻出している。安定した収入源をもたない場合、どの家庭も非常に切り詰めた生活を強いられる。しかし、その割にはさほど苦勞をしているという印象を外部の者に与えない。人びとはいたって陽気に暮らしているように見える。このようなところに彼らのたくましさがある²⁹。

付加的な要因の第2はコミュニティ（共同体）の存在である。あるいは、血縁、地縁、信仰上の共同体などゲマインシャフト的な関係の存在と言ってよい。マイノリティ住民のすべてがヴァイタリティーにあふれる強者であるわけではない。また人は様々な事情により困難な状況に陥ることがある。このような場合、とくに金銭面において、もっとも頼りになるのは家族である。ボスニア・ヘルツェゴヴィナの家庭では親子兄弟の結びつき

が非常に強い。帰還者の家庭で子どもが他出し、国内外で働いている場合にはたいていの場合、実家に仕送りをしている。それによって帰還地域に残留するマイノリティ住民は自らの収入の低さを補っている。またボスニア・ヘルツェゴヴィナの地方社会では近所の人びとや友人との付き合いは濃密であり、この関係に基づく相互扶助も日常におこなわれている。困ったときには遠くの親戚や子どもよりも近くの他人が助けてくれるという関係が今なお続いている。このような関係の存在もまたマイノリティ住民の残留を支援する重要な要因である。

しかし、頼りになる子どもがいない場合や近くに手助けをしてくれる隣人や友人がいない場合にはどうなるのか。先進国の場合には社会福祉や社会保障制度の出番となるところであるが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナではこれはきわめて貧弱である。たとえば、日本で生活保護費に当たる給付費はセルビア人共和国では一世帯に月額120KM（60ユーロ）であり、それだけではどうも生活ができない。しかも条件が厳しく、受給できる人は限定されている。人びとが困った場合に最終的なセーフティ・ネットを提供しているのはキリスト教の教会またはイスラームの慈善組織である。カトリックにせよ、正教にせよ、キリスト教の教会には救貧活動の伝統があり、附属の救貧施設ないし修道院・教区司祭の住宅は身寄りのない人に食事を提供したり、住居を提供したりしている。イスラームもまた独自の慈善組織をもち、社会活動や救貧活動を熱心におこなっている。

しかも、生活上に困ったことがなくても信仰上の組織はマイノリティ住民の残留に対し、重要な貢献を提供している。キリスト教の教会では儀礼（カトリックではミサ、正教では聖体礼儀）があり、日曜日には多くの信者が祈りを捧げる。その祝日には儀礼の後に食事会のようなものがあり、信者は聖職者を囲み、会食と歓談をする。イスラームの場合もモスクは礼拝のため、信者が日々集う場所である。教会やモスクでの儀礼や礼拝、その後の会食と歓談を通し、人びとは信仰上のコミュニティへの所属を実感する。この信仰上のコミュニティはマイノリティ住民の心を癒し、彼らの残留

を精神面で支える重要な役割を果たしている。

付加的な要因の第3は「故郷への特別の思い」ないし「エートス」である。これには二つのものがある。一つはここが自分の故国であり、故郷だという思いである。内戦中に外地へ避難せず、マジョリティの側からの迫害に耐えて居住地に残留したマイノリティ住民に話を聞くと、このような故郷へのこだわりを強く感じる。この思いは慣れ親しんだ土地で生活したいという願いにつながり、避難をした人びとにとっては元の居住地へ帰還する際に大きな動機になった。それはいいかえると、昔からの知り合いや親戚がいる場所で伸び伸びと暮らし、安心感を得たいという気持ちである。とくに年配者の間では異郷の避難地で死ぬよりも先祖代々の墓がある故郷で最後を迎えたいという気持ちが強い。帰還者の中には親世代のそのような願いをかなえるために帰還した人も多い³⁰。

もう一つは故郷やそこに住む同胞に貢献したいという考えである。これはある種のナショナルな使命感であり、一部のマイノリティ住民にとっては帰還と残留の決定的な要因になっている。今回の調査事例に即して言えば、バニャ・ルーカに帰還し、社会教育センターの所長を務めるイーゴル・ルケンダ氏とコートル・ヴァロシュのシーボヴィに帰還し、機械部品工場を設立したマリッチ兄弟がこのケースに該当する。彼らの場合、損得勘定

だけを考えると、多くの避難民がそうしているように、移住した土地に留まることも選択できた。しかし、そうせずにあえて帰還したのは故郷とそこに住むクロアチア人の役に立ちたいと考えたからであった。

以上はマイノリティ住民の残留を支援する要因をポジティブな側面から指摘したものである。しかし、彼らの残留を支える要因はポジティブな側面からだけでなく、ネガティブな側面からも考えることができる。いいかえると、帰還地域ではマイノリティ住民に対して残留を促進する要因と残留を抑制する要因が働いている。残留を抑制する要因とは、残留の障害となる要因といいかえることができる。したがって、ネガティブな側面から考えると、帰還地域で残留の障害となる要因が小さいことがマイノリティ住民の残留を支える要因となる。逆に残留の障害となる要因が大きいと帰還地域にマイノリティ住民が残留することはより困難になっていくと考えられる。

ではマイノリティ住民の残留の障害となる要因とは何か。ここでは三つの要因を指摘したい。一つは生活基盤の欠如である。具体的には破壊された住宅を再建できないこと、インフラストラクチャが復旧していないこと、就業機会ないし生計の手段がないことの3点が挙げられる。このうち、就業機会の欠如は恐らく最大の阻害要因だと考えられる。他に収入源がない場合には、就職が



写真47 セルビア正教の祝日、7月12日の「聖ペテロの日」の行事。ボサンスコ・グラホヴォの教会の周辺を聖職者と信者が行進する。



写真48 正教会の儀礼（聖体礼儀）の終了後にセルビア正教聖職者の教区居宅で開かれた昼食会。近隣の住民が集い、歓談する。最後は地元の民謡を皆で合唱し、一体感を深める。

できない地域に帰還し定住しようとは誰も考えないであろう。実際、住宅を再建しながらも、就業機会がないために残留をあきらめ、帰還地域を去った人も多い。コートル・ヴァロシュのクロアチア人の帰還地域の調査事例でみたように、帰還した住民がいないとインフラストラクチャーの復旧は先送りにされる。それがまたマイノリティ住民の帰還を一層困難にする大きな要因となるといふ悪循環が発生する。

調査事例が示すように、帰還地域では民間企業や公共セクターの常勤職のポストはマジョリティ住民で占められ、マイノリティ住民が新たに割り込んで職を得ることは大変困難な状況になっている。それは一見するとマイノリティ住民に対する差別や排除のように見えるが、実際には単純にそうだと言えない側面がある。なぜなら、帰還地域ではマジョリティ住民にとっても企業や公共セクターの常勤職への就職は大変狭き門であり、就職の機会を待っている人や失業者の数は大変多いからである。いいかえると多数派の民族集団に属する住民も同様に就職難に苦しんでいる。このような状況ではマイノリティ住民の就職難は当然の成り行きである。もちろん、採用に際し、マイノリティ住民に対する差別が起こりえないとは言い切れない。しかし、根本的な問題は経済発展が停滞し、就業機会が拡大しないことである。このような状況が改善されないと、帰還地域にマイノリティ住民が残留することは長期的には一層困難になっていくと考えられる。逆に就業機会が拡大すれば、マイノリティ住民の就職のチャンスも増大し、それはマイノリティ住民を残留させる大きな支援要因となるはずである。

マイノリティ住民の残留の障害を除去する、あるいは残留の障害を小さくするためには経済発展と就業機会の拡大が不可欠である。このことはボスニア・ヘルツェゴヴィナでは誰もが理解していることである。しかし、経済だけが問題なのかというそれはそうではない。二番目の要因として、政治的・行政的な支援の有無もマイノリティ住民の残留に大きく影響している。今回の調査事例で言えば、ボサンスコ・グラホヴォでは基礎自治体の行政機構のトップはボスニア連邦ではマイノリ

ティ民族であるセルビア人であり、基礎自治体の議会もセルビア人の議員が多数を占めている。もちろん、県レベルの政治と行政機構はマジョリティ民族のクロアチア人が支配しており、彼らの意向や裁量によって基礎自治体レベルの政策決定は大きな制約を受けている。しかし、基礎自治体の政治と行政機構をセルビア人が握っていることは当地に帰還したセルビア人に大きな安心感を与え、彼らの残留を支える要因の一つになっていることは疑いない。たとえば、限られた財源のために進捗は遅いが、ボサンスコ・グラホヴォでは電力施設や水道施設などインフラ施設の復旧は毎年少しずつ進行し、住民の生活条件は着実に改善している。これはセルビア人首長マキッチの尽力によるところが大きい³¹。また森林監督署への女子学生の就職の推薦の事例にみられるように、セルビア人首長は機会を見つけては若者に雇用のチャンスを与えている。これもまた若者には大きな支援である³²。

これに対し、バニャ・ルーカにせよ、コートル・ヴァロシュにせよ、セルビア人共和国でのマジョリティ民族であるセルビア人が基礎自治体の政治と行政を支配しているので、ボシュニャク人にせよ、クロアチア人にせよ、マイノリティ住民とその居住地域に対する政治的・行政的な支援や配慮は希薄であり、マイノリティ住民の帰還と残留を妨げる一因になっている。とくにバニャ・ルーカではマイノリティ住民に対する政治的・行政的な支援や配慮は皆無に近く、当地に残留するボシュニャク人やクロアチア人は大きな疎外感と無力感を感じている。

三つ目の障害は教育環境である。これは就学期の子どもをもつ人びとにとっては大変重要な問題である。子どもを育てるためには教育環境が整っている必要がある。この点では今回の調査事例のボサンスコ・グラホヴォはまだましな条件の地域である。町の中心部には初等学校が存在する。隣町には中等学校があり、1時間程度で通学が可能である。しかし、問題は学校があることだけではない。もう一つ重要な要因は、この町の初等学校ではセルビア人の生徒はセルビア語の教科書を使用し、民族的な授業科目を受講していることであ

る。これはセルビア人の生徒が学校で多数を占めるために可能になっていることである。この点ではセルビア人共和国のボシュニャク人の帰還地域でもボシュニャク人の生徒数が多い地域では初等学校で民族的な授業科目が導入されている。

ところが、マイノリティの生徒の数が少ない場合には民族的な授業科目が導入されず、他民族の授業科目を受講するしか選択肢がない。今回の調査事例ではセルビア人共和国コートル・ヴァロシュのクロアチア人の生徒がこれに当たる。クロアチア人の人口がもっと維持されていたならば、彼らの子どもが多数通う初等学校が存在し、民族的な授業科目の導入が可能になったかもしれない。しかし、クロアチア人の人口がこれだけ激減し、初等学校に通う生徒は1学年に一人か二人しかいないとなると、民族的な授業科目は導入されない。クロアチア人の子どももセルビア語の教科書を使用し、セルビア人の民族的な授業科目を学習せざるを得ない。これはコートル・ヴァロシュを去り避難地に居住するクロアチア人、とくにクロアチアに居住するクロアチア人にとっては受け入れがたい事態である。コートル・ヴァロシュに限らずセルビア人共和国では、このような教育環境の問題もクロアチア人の帰還と残留が非常に少ない一因を形成している。

本稿では三つの調査事例に基づき、マイノリティ住民の残留の要因を考察した。しかし、これらの三地域でボスニア・ヘルツェゴヴィナの多様な帰還地域を代表させることは無理があると私は感じている。たとえば、ボサンスコ・グラホヴォのセルビア人はマイノリティ住民であるとはいえ、この町ではマジョリティの住民である。ボスニア連邦には県レベルでも基礎自治体のレベルでもマイノリティになっているセルビア人がいる。たとえば、モスタールのセルビア人がそうである。他方、セルビア人共和国のクロアチア人についてもバニャ・ルーカやコートル・ヴァロシュよりも帰還者が多く、残留する住民が積極的な活動をしている地域がある。ボスニア北東部のボサンスカ・ポサヴィナがそれである。これらの地域にはまた異なった状況があるように思われる。また都市部に住むマイノリティ住民、とくにボシュニャ

ク人がどのように残留しているのかについてはまだ調査と分析ができていない部分がある。これらの地域とそこでの問題についてさらに調査と分析を進め、マイノリティ住民の残留に関してより説明能力の高い仮説を提出することが今後の課題である³³。

注

- 1 ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける民族浄化のプロセスがどこまで元に戻ったのかを研究している地理学者のジェラルド・タールとカール・ダールマンは「民族浄化は成功したか？—ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるマイノリティの帰還の地理学とその意味—」という論文の中でその調査結果を次のように結論付けている。「オーブシュティナ（基礎自治体）のレベルでみた場合に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナがかつてのように多民族的な社会ではないのは争う余地のない事実である。しかし、ボスニア・ヘルツェゴヴィナはアパルトヘイト的な地理学的政策（an apartheid political geography）が支配的であった戦後直後の状態に比べると、はるかに多民族的な性格に戻っている。2006年のボスニアは1991年の多民族社会と1996年のアパルトヘイト社会の中間にある。少なくとも人口学的にみた場合に民族浄化は成功していないが、さりとてそのプロセスは元に戻っていない。明確に同質的な民族のホームランドは形成されていない」（Gerard Toal and Carl Dahlman, “Has Ethnic Cleansing Succeeded? Geographies of Minority Return and Its Meaning in Bosnia-Herzegovina”, in Dayton Ten Years After : Conflict Resolution, Co-operation Perspectives, edited by Anton Gosar, Primorska, Slovenia, 2006, p.20）。
- 2 UNHCR, Briefing Note on UNHCR and Annex 7 in Bosnia and Herzegovina, 2007.
- 3 1991年まで存続したユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国では、イスラーム信者とその子孫の南スラヴ人を指す「ムスリム人」が民族区分として認められていた。したがって、1991年に実施された人口調査では「ムスリム人」の語が使用されている。しかし、旧ユーゴスラヴィアの崩壊後、ボス

- ニア・ヘルツェゴヴィアのイスラーム信者とその子孫の南スラヴ人を指す民族区分として「ボシュニャク人」が認められるようになった。旧ユーゴスラヴィアの時代の「ムスリム人」と現在の「ボシュニャク人」の中にはイスラームの信者が多い。しかし、これらは宗教的区分ではなく、民族区分であるのでイスラームを信仰しない人びとも含まれる。また「ムスリム人」は地域的な名称ではなく、旧ユーゴスラヴィアの全地域の人びとが名乗ることができたが、「ボシュニャク人」はボスニア・ヘルツェゴヴィナを出身地ないし民族的故地と考える人びとが自称する民族名である。本稿では、混乱を避けるため、旧ユーゴスラヴィアの時代のボスニア・ヘルツェゴヴィナの「ムスリム人」は「ボシュニャク人」に置き換えて叙述していることをお断りしておきたい。
- 4 このとき隣接するクロアチアの南西部にはクロアチアのセルビア人勢力が支配する地域があった。ボスニア北西部を制圧した後、クロアチア政府は国内のセルビア人勢力の支配地域を東西から挟撃する計画を立てていた。
 - 5 住民に対する表向きの説明では戦力と人口を温存するために一時的に退却するということがあったが、この地域はセルビア人勢力の支配地域としては母国セルビアからもっとも遠く、クロアチア人やボシュニャク人の支配勢力の支配地域に囲まれた飛び地のような地域であったため、セルビア人勢力にとってどうしても死守すべき領土ではなかったからだといふ間では語られていると、地元の案内者でセルビア共和国軍に従軍した経験のあるドラギシャ・コヴァチェヴィッチ氏から聞いた。
 - 6 マキッチ氏はセルビア人共和国大統領のミロラド・ドディック (Milorad Dodik) が党首を務める独立社会民主同盟 (Savez nezavisnih socijaldemokrata : SNSD) に所属する。ドディックとは頻繁にコンタクトをとっており、私の滞在時にも緊急の会議が招集されたと述べて、急遽バニャ・ルーカに出かけていったことがある。
 - 7 そのため、ファスト・フードが必要な場合、町の住民はミニスーパーの精肉売り場でハムやサラミ、チーズなどのスライスを頼み、これをパンに挟んでサンドイッチを作ってもらふ。私もこれにならって毎日サンドイッチを注文し、昼食にしていた。
 - 8 クロアチアのクニンは1995年7月までクロアチアにおけるセルビア人勢力の占領地域の中心地であった。しかし、1995年8月初めにクロアチア政府軍の進攻によって陥落し、クニンのセルビア人はすべて国外に去った。それゆえ、クニンで働いていたすべてのセルビア人は仕事を失った。
 - 9 この集落には2012年12月に電線が敷設され、電気が復旧した。私が訪問した2012年7月はまだ電気が復旧していなかった。以下はそのときの状況である。
 - 10 旧ユーゴスラヴィア連邦の時代には一般に「セルビア・クロアチア語 (Srpsko-hrvatski jezik)」と呼ばれていたが、クロアチアでは順序を逆にして「クロアチア・セルビア語 (Hrvatsko-srpski jezik)」と呼ばれていた。なお旧ユーゴスラヴィア連邦の時代にはセルビア・クロアチア語はセルビア人、クロアチア人、ボシュニャク人 (ムスリム人) の共通言語と考えられていたが、連邦の解体後にボスニア・ヘルツェゴヴィナではボシュニャク人の言語として「ボスニア語」が公用語として認められた。ボシュニャク人が多数を占める初等学校ではボスニア語の教科書が使用される。ボスニア語はラテン文字を使用し、クロアチア語に非常に近い。しかし、ボスニア語の国語の教科書ではボシュニャク人の歴史や文学を強調する形で内容が記述されている。
 - 11 彼によれば、6単位の科目と学士論文の執筆を残している。しかし、身分は非正規の学生、現地の言葉では *izvanredovni student* に切り替えている。非正規の学生には在学年限がなく、履修すべき単位がそろい、学士論文の審査と口述試験にパスすればいつでも学士号 (*diploma*) を取得できる。たとえば、先に紹介したボサンスコ・グラホヴォの初等学校校長のヴォヤ・マリッチ氏はサライエヴォ大学の教員養成学部で学び、1989年までに学士論文以外のすべての必要単位を取得していた。しかし、学士論文を執筆し、バニャ・ルーカ大学に提出、口述試験に合格したのは2005年のことであった。正規の教員、とくに校長の職に応募するためには学士号の取得が必要だったからである

- 12 ダルコ・サリッチ氏は彼の方から私に接触を求めてきた。サッカー場の建設のために日本の援助を得たいと考えていたからである。
- 13 材木和雄、「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける難民の帰還とその実態—『マイノリティの帰還』を中心に—」、『環境科学研究』第7号、2012年。
- 14 サービスの内容で異なるが、時給は2.5-5.0KM (1.2-2.5ユーロ) だという。修了資格を得た卒業生は何人かの仲間同士で団体を作り、顧客から介護の申し込みを受け付けている。
- 15 バスターシおよびコートル・ヴァロシュのボシュニャク人集落への訪問についてはバニャ・ルーカに本部をもつ帰還住民の支援団体「バニャ・ルーカへ帰還した市民の連合」(Udruženje građana povratnika u Banjaluku) のお世話になった。記して感謝したい。
- 16 2010年6月11日のボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦ラジオテレビ局 (Radio Televizija Federacije BiH ; FTV) のニュース報道による。なお地元コートル・ヴァロシュのボシュニャク人犠牲者の団体はボシュニャク人犠牲者の数を464人と述べている (Dvije decenije od stradanja Bošnjaka Kotor Varoša, Preporod, 22 Novembar, 2012)。
- 17 ただし、ボシュニャク人の側も報復をしなかったわけではない。1992年9月17日にはコートル・ヴァロシュのセルビア人の村セルダリー (Serdari) がボシュニャク人武装勢力によって襲撃され、16人の民間人住民が殺害された。この事件については4人のボシュニャク人元兵士が起訴され、裁判が続いている。
- 18 後に紹介するインタビューの対象者で、コートル・ヴァロシュの基礎自治体の役場に勤め、1991年当時人口センサスの調査と集計に従事したジヤード・スマイロヴィッチ氏の指摘による。
- 19 この事件については2012年7月、オランダのハーグで開かれている旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷で殺害を逃れた住民が生々しい証言をし、初めて国際的な注目を浴びた。元セルビア人共和国軍の参謀総長のラトウコ・ムラディッチ (Ratko Mladić) に対する裁判である。証言者は当時14歳のボシュニャク人の少年であり、現在はアメリカ在住のエルヴェディン・パシッチ (Elvedin Pašić) 氏。父親とおじが殺害されたと述べている (Sudjenje Mladiću_ Svjedok u suzama opisao rastanak s ocem, Radio Slobodna Evropa, 09 .07.2012)。
- 20 もっとも、ヴルバニチでは最近、集落内にある初等学校の分校で民族問題に関係したトラブルが一つある。それは授業科目に民族的な科目 (ボスニア語、ボシュニャク人の観点で書かれた歴史・地理・自然および社会、信仰の時間) の導入をボシュニャク人の生徒の保護者が要求し、これをセルビア人共和国の教育文化省が拒否していることである。この分校では全校282人のうち、ボシュニャク人の生徒は142人と過半数を占め (セルビア人は136人、クロアチア人が2人)、ボシュニャク人の生徒の保護者はセルビア人共和国の憲法に定められた権利であるとして民族的科目の導入を要求している。2013年6月には学年末の二日間、ボシュニャク人の保護者が抗議のために子どもを学校に通わせないという事件も発生した。この問題は2013年9月に始まった新学期になっても解決せず、ボシュニャク人保護者の側の抗議が続いている。彼らはこれまでボシュニャク人の政治家に問題解決を訴えてきたが、さらに欧州安全保障協力機構 (Organization for Security and Co-operation in Europe ; OSCE) の職員と Dayton 和平協定の履行を監視する国際機関である上級代表事務所 (Office of the High Representative ; OHR) のバニャ・ルーカ駐在職員に面会し、首都サラエヴォに駐在する上級代表のワレンティン・インツコ (Valentin Incko) に問題状況を知らせるように求めている。以上は”Roditelji bošnjačke djece i učenici obustavili nastavu u Kotor Varoši”, FENA(Federalna Novinska Agencija),14.06.2013.”, “Rastu tenzije u Osnovnoj školi “Sveti Sava” u VrbanjcimaRoditelji dočekale provokativne poruke”, Dnevni avez, Online izdanje, 18.09.2013、による。
- 21 応対してくれたのは、ドラガン・ユリチェヴィッチ、マト・ロヴレノヴィッチ、イリヤ・マリッチの3氏。ドラガン・ユリチェヴィッチ (Dragan Juričević,1966年生) 氏はセルビア人共和国議会に諸民族の代表機関として設置されている民族評議会 (Vijeće Naroda) の議員を務める。1966年生まれの妻との間に一男 (1990年生) 一女 (1997年

- 生)をもつ。ユリチェヴィッチ氏は内戦前に当地の企業で建築士として働いていたが、内戦開始後は1992年に妻子と共にドイツのシュトゥットガルトに難民として滞在した。ドイツでは生活費を稼ぐためにあらゆる仕事に従事したと述べている。2000年にコートル・ヴァロシュに帰還、自宅を再建したが、現在はバニャ・ルーカに居住する。マト・ロヴレノヴィッチ (Mato Lovrenović, 1946年生) はコートル・ヴァロシュの自治体議会の議員で社会的監察委員会 (Komisija za društveni nadzor) の議長を務める。ロヴレノヴィッチは内戦前には当地で保険会社に勤務、1992年にクロアチアのスプリットに避難、2001年に帰還し、自宅を再建した。1953年生まれの妻との間に一男 (1973年生) 一女 (1981年生) をもつ。二人の子どもは共にクロアチアに居住し、息子はスプリットで弁護士になり、娘はシーベニクに住んでいる。イリヤ・マリッチ (Ilija Marić, 1942年生) 氏はこのときコートル・ヴァロシュの自治体議会の議員で副議長の地位にあった。マリッチ氏については、その居住集落を訪問したため、経歴は本文で紹介する。
- 22 “Novi pokazatelji otkrivaju da je u Banjolučkoj bi skupiji sve manje Hrvata, Samo u jednoj godini je ‘nestalo’ 496 katolika”, *Vecernji list*, 25.02.2013.
- 23 “Traži se pomoć za Hrvate u Kotor Varoši”, *bitno.ba*, 30.01.2012.
- 24 プリツカの訪問はセルビア人共和国議会の民族評議会議員のドラガン・ユリチェヴィッチ氏の案内による。彼はこの記念式典の組織者の一人であった。
- 25 2013年9月にコートル・ヴァロシュのアント・シムノヴィッチ教区司祭から聞いた話では、ベトロヴィッチ兄弟はまだザグレブとコートル・ヴァロシュを往復する生活を続けていて、コートル・ヴァロシュに常住していない。その理由はまだ住宅の再建が完了していないことと、電力の供給が不安定であるためだという。
- 26 クロアチア人の帰還者が創業した企業だからといって、クロアチア人を優先的に雇用しているわけではないようである。内訳は聞けなかったが、この工場ではセルビア人、クロアチア人、ボシュニャク人の三民族が働いている。工場内を案内したセルビア人の技術者ムラーデン・カラマンダ氏によると、従業員の採用は民族帰属ではなく技能や経験に基づいているという。
- 27 たとえば、International Crisis Group, *Going Nowhere Fast : Refugees and Internally Displaced Persons in Bosnia and Herzegovina*, ICG Bosnia Report No.23, 1997, p.35-36.
- 28 たとえば、食費の節約のため、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの家庭では内戦前に比べて肉を食べることが格段に少なくなっている。そのため、私が滞在したボサンスコ・グラホヴォのコヴァチェヴィッチ氏の自宅では食事の際に母親がシチューに肉が入っていないことを申し訳なさそうにしていた。
- 29 「ボスニア・ヘルツェゴヴィナに住む帰還住民は民族に関係なく芸術的な生き残りの術を身につけている」。このように述べるのはボサンスコ・グラホヴォの基礎自治体で働く女性職員ジェリカ・プルシャ (Željka Prša) 氏である。彼女は1999年にボサンスコ・グラホヴォに帰還したが、その後10年以上定職をもたなかった。2010年によく基礎自治体の職員に採用された。この間、主として耕作と牧畜で生き延びてきたという。
- 30 ボスニア・ヘルツェゴヴィナの集落の中には通常、その集落住民の共同墓地がある。墓地の中で住民は家族ごとにある程度まとまったスペースを保有する。彼らは個人単位で遺体を埋葬し、その氏名と生存期間を刻んだ墓石を建てる。住民にとってこれらの墓は家族の絆とルーツを確認する場である。ある訪問地 (モスタールのヴラプチッチ Vrapčići という名の集落) の墓地では案内者の住民は祖先の墓石を指して自分の家はこの土地ではこれだけ古いと誇らしげに私に語った。集落の墓地と各信仰の礼拝施設は通常、同一の敷地内にある。キリスト教徒の場合、信者は宗教上の祝日に聖職者の司会の下に典礼儀式に参加し、その後に家族や先祖の墓参りをする。たとえば、セルビア正教では7月12日の「聖ペテロの日」がそうである。礼拝堂での典礼儀式の後、信者の住民は家族や先祖の墓の前に集合する。聖職者は墓地の中を巡回し、住民の家族や先祖の墓の前で供養の言葉を唱える。私が訪問した地域では、民族に関係なく、住民は家族や先祖の墓を非常に大事にしていた。

たとえば、その一つに内戦中に全住民が追い出され、内戦後も帰還者が一人もなく、無人の土地になったセルビア人の集落がある（モスタール近郊のボゴドール Bogodol という名の集落）。住民の住宅は内戦中に破壊され、残骸を残すのみで、再建されていない。しかし、国内外の各地に離散した住民は毎年「聖ペテロの日」に帰還し、墓参りをおこなっている。2012年に彼らは資金を出し合っで内戦で破壊された集落の教会の礼拝堂を再建した。2013年の「聖ペテロの日」に私はこの集落を訪れたが、普段は人気のない荒地の中に数多くの外国ナンバーの車が駐車し、総勢100人近い旧住民が典礼儀式への参加と墓参りのために礼拝堂に集まっていたのは驚きであった。イスラーム教徒の場合には墓参りの習慣はないが、どの集落でもモスク（礼拝堂）に隣接して、あるいは同一の敷地の中に共同墓地を設置し、小ざれいに管理している。その中で住民はキリスト教徒の墓石に比

べると格段に小さいが、個人の氏名と生存期間を緑字で刻んだ白い墓石を建てている。

- 31 たとえば、近年の郊外地区の水道施設の復旧は日本政府の援助資金によってなされたが、これはセルビア人首長マキッチの積極的な働きかけのたまものである。
- 32 そのため、ボサンスコ・グラホヴォの住民の間では「首長はよくやっている」という評価が広がっており、それが2012年10月の首長選挙でのマキッチの再選に寄与したことは疑いない。
- 33 また査読者から次のような参考意見があった。「統計資料の入手は困難と思われるが、各調査地の産業構成や階層構成の紹介があると各調査事例が非専門家の読者にもわかりやすくなるかもしれない」。まことにその通りであるが、今回は資料をもたないため改善の対応ができなかった。今後の調査で適当な資料を探し、別の報告機会に叙述を補足したいと考えている。